
半藤一利・藤井裕久 本音トーク

昭和史・現代政治・平和と戦争

国家の品格は「平和」を守ること

歴史探検家と政界顧問が憂慮する「平和から戦

間期へ」の萌芽

賢人・達人から本音を聞く会 編

二〇一八年六月五日（火） 芝白金台・藤井裕久事務所

話す人	
半藤一利	
藤井裕久	
聞き役	
伊藤健一	
尾崎美千生	
堀内正範	
山田哲司	
脇山真木	
見出し	
まずは乾杯。「東京大空襲」では死ぬところ	4
岩波から出す『聞き書回顧録』の件で	7
角栄さんは真底から平和主義者であった	10
「繰り返す歴史」(戦争)への憂慮	13
政官界の緊張感を支えたのは派閥の力	15
半藤さん著の歴史ものからあれこれ	20
時代の逆風を受け政治家は根を太くする	24
国際協調の潮目がまたアメリカから反転	27

赴任先の現地言語で議論ができない外交官	3
不人気の消費増税に賛成した野党自民党	3
中国侵略の発端は「民族的な悪い癖」	3
悲惨だった日露戦を知る軍人は非戦論者に	4
戦禍を知らない世代に平和は守れない	4
ニッポンは地政学的に守りづらい国	5
「日本国憲法一〇〇年」を国際的に迎える	5
野党とマスコミの役割は国民をおおること	5
人間としての自衛官をつくる防衛大学校	6
「双葉山敗れる」騒ぎの裏で進んだ戦時体制	6
公正中立の軸を見失った国家公務員	6
安倍昭恵夫人という人のこと	7
「民族的な悪い癖」の歴史検証が優先事項	7
軍隊とは独断専行するもの	7
どうしてアジアのあんなところが戦場に	8
戦争へむかう小さな芽を摘みつつける	8
「国家の品格」(国益)は平和を守ること	9

まずは乾杯。「東京大空襲」では死ぬところ

藤井 きょうはよくぞこんな場末にまでおいでいただいたて。

半藤 いえいえ、実はすぐそこに東大医科研というのがあります。

藤井 あります、あります。

半藤 そこがわたしの病院なんです。手術はしませんけれど、入院したのもぜんぶそこでして。ですからちよいちよい来ています。白金台のこのあたりは身近なんです。

藤井 それは、それは。ここは藤原銀次郎の邸だったようで。となりもみんなそうです。あとが持ちきれなくなっただんでしようね。

半藤 そうでしたか、藤原銀次郎の。

藤井 遠来の大先輩にはまずはお茶を。

山田 われわれの会ではこれが恒例でして、まずは焼酎をビールで割って・・・これが藤井流です。

堀内 半藤さんの昭和史の会では、半藤さんのセミナーがひととおり終わってからここにくるのですが、この会はのっけから酒ではじまる。

半藤 ほう、なんだか酒を飲みに来たようで。

藤井 きょうの日本酒は「浦霞」ですが、わたしがお付き合いした日銀総裁の三重野さんはこれしか呑まない。

半藤 「浦霞」というのはおいしい酒ですよね。名前も実にいい。宮城県の酒ですよね。

藤井 冷えてないんで、ごめんなさい。

尾崎 半藤さんは、ご出身は東京の向島でしたね。むかしは梅やしきなんかがあつて、梅で有名な。

半藤 はい、出身は向島なんです。向島では有名な玉の井の隣の町です。玉の井の中ではないのですけれど。(笑い)

堀内 子どものころ遊びに行つたとか書かれていますけれど。

半藤 玉の井というのは「売春禁止法」が出るまでは赤線です。子どものころからよく通つたとはいいませんけれど。(爆笑)

山田 永井荷風の世界。

藤井 あの三月一〇日の「東京大空襲」のときは中川で浮いていたって聞いています。

半藤 浮いていたといいますが、火に追われて落っこちて、危なく死ぬところでした。

藤井 隅田川でなくてよかったです。隅田川ではみんな死んでいる。

堀内 半藤さんはあの夜のすさまじい火の中を。

半藤 ええ、猛火と猛煙の中をくぐつて。

藤井 だから半藤さんもわたしも本能的に戦争は嫌いなんだよ。

三月の「東京大空襲」のときにはわたしは疎開で久米川と行って小平にいました。夜の東京の空は真っ赤でしたね。その後に東京に帰ってきたのです。そうしたら親が学校にこられない人がいましたよ。下町の実家から親がこない。どこへいったかわからない。

半藤 わたしは東京下町の向島ですが、オヤジは新潟県なんです。ですから出とえば新潟県なんです。母親のほうは茨城県でして、選挙区でいうと赤城宗徳さんのところ・・・。

山田 先生、お酒はどういうふうには。

藤井 あなたがやってくれ。きょうの酒は「浦霞」ですが、三重野さんと日本航空に乗ると、これしか積んでいないんです。

それではまずはこれで乾杯！

尾崎 半藤さんは文春には長くおられて、いろいろなさったんでしょ。

半藤 ええ、文春は四二年おりましたから。昭和二八年にはいりまして、平成五年までいたんでしょかね。

藤井 トップまでいかれているんですよね。

半藤 いやいや。そんなに偉くはないんです。

藤井 実際にトップですよ。

堀内 『文藝春秋』は底知れない根の深い月刊雑誌の雄ですね。

岩波から出す『聞き書回顧録』の件で

藤井 半藤さんにははじめにお詫びしなければならぬですけれど。例の岩波が進めている聞き書きの件で。

三年かけて東大のほうで聞き書き調査をやったのに、あまりに反安倍だから出せないといいました。それで半藤先生にお願いして、だれか良い人いませんか。とうかがったら、それでは文春につなげてみましょうといってください。

半藤 文春から出るものばかり思っていましたけれど。

藤井 そしたら御厨さんが帰ってこられて、「これ三年やったんだぞ、それなのに反安倍だからやめるとはなんだ」といってさうとう怒ってください、はじめの企画どおり岩波でやってくれることになって。

せっかく半藤さんに文春の重役の方まで紹介していただいて、使っていいかというので全部お出ししたのに、本当に申し訳ないと思っています。御厨先生のおかげなんです。

堀内 岩波の『聞き書回顧録』は、宮澤喜一さんや先日亡くなった野中広務さんのものが出ていますね。出版には「オーラルヒストリー」という領域が広く了解されているんですね。

半藤 そうです、そうです。御厨さんが開拓しまして。

山田 書棚のそこにあります、宮澤喜一、武村正義、野中広務・回顧録で聞き書きです。

半藤 みんな御厨さんのなさった聞き書きですよ。

堀内 その一冊として藤井先生の『聞き書回顧録』が岩波で三年がかりで準備されているとかがって。政治家としての藤井先生のおしごとの全容がきちんとした構成の同じスタイルのものとして進行中ということなんですよ。

半藤 そういうことなのでしょうね。

藤井 すいません。あっちも出すんですが、こっちもしっかり出してくださいますよ。

堀内 その点われわれのほうの聞き書きは、二〇一二年に、藤井先生が「消費税」で民主党の野田首相を支えて野党の自民党をまきこんで両院を通過させたあたりからはじめています。

引きつづき民主党にはおられたけれど、議席を離れて政党のわくを越えて、政界の名誉顧問といったお立場で活動をされるようになってからのものです。野中さんの場合とちがって、藤井先生のご発言はなおさまざまな影響を持ちますから、岩波も準備はできてみずくには回顧録としては出せないかと推測されますね。

藤井先生は「政治家は歴史に学べ、とくに軍国化に傾いていった昭和史に学

ばないと不幸な歴史を繰り返す」という危機感を強くされておられて、それを「安倍一強」という世相の動きとして憂慮されています。この間、年に二回ずつお訪ねして聞き書きをつづけてきたのですが、今回は半藤さんと藤井さんの対話として、「昭和史・現代政治・平和と戦争」についてお話していただく特別企画としています。

半藤 出版元としては岩波に対して朝日あたりはどうなんですか。

堀内 朝日から出すかどうかまではいいないのですが、こういうことをやっていることは伝えてあります。

今回はおふたりの貴重な対話ですから、いわゆるマーケットの心配はしていないのですが、本として出すには政治状況の流動の時期でもあるし、版元としての判断は内容と時期を見計らつてのことでしょうから、どこも確定するところまではいつておりません。まとめの時期にあること、ことの緊急性は感じています。

半藤 そうなんですか。

藤井 朝日新聞では早野透さんとは長い付き合いで、そこにも早野さんの『政治家の本棚』というのがある。

伊藤 はい、ここにあります。

藤井 そこにわたしのことも書いてくれているんです。

尾崎 早野さんは藤井先生の民主党での「昭和史研究会」で、金権主義ではない平和主義者の田中角栄さんの話をしてくれた。

藤井 そうでしたね。それは政治家がどんな本を読んでいるかという本なんです。わたしのことはなんと書いてあったか細かいことは忘れちゃったけれど・・・（本を手にとって）早野さんとは仲よしでしてね。あ、これだ、選挙中に『ローマ帝国衰亡史』を読んでいた。（爆笑）

落選中のことで、あとでこれを読んだ人に怒られたんですよ。おれたちは徹夜でお前の再選を期してやっているときに何だといって。こっちは選挙の役にたたないから、その書棚の最上段にある『ローマ帝国衰亡史』を読んでいたんです。

堀内 そのあと選挙は当選した。

藤井 入ったんです。

堀内 藤井さんらしいエピソードですけれど、もし落ちでもしていたらたいへんでしたね。早野さんも書けなかったかもしれない。

藤井 選挙に出た理由の最たるものは、ぼくは角さんの弟子だということなんです。それだけなんです。

角栄さんは真底から平和主義者であった

藤井 伊藤さん、そこにある『人間田中角栄』、それがまた最近出たんですよ。
伊藤 これですか。

藤井 そう、最近また出たんですよ。

半藤 石原慎太郎の『天才』のあと、誰だかが出していると聞きましたが。

藤井 これはつい最近、ことしの五月に宝島社から出ているんです。この中に書いていますが、「真の平和主義者であった角さん」。これはほんとなんです。この本はそうとうほんとのこと書かれていますね。宮城まり子のことなんかも。

半藤 わたしのオヤジのところの選挙区が新潟の田中角栄さんの選挙区でした。

藤井 そうなんですか、長岡。

半藤 ええ、いまは長岡市になりましたけれどもオヤジの生まれたのは、その在の寒村で・・・

藤井 かれは西山町。

半藤 はい、わたしは来迎寺の隣です。田中角栄さんが三二歳でしたか、昭和二一年の総選挙に出て、落ちたはずですが。その時の角さんの演説を聞いているんですよ。いちばん若い時の演説でしょうね。わたしの村まできてやったんです。堀内 とくに際立った印象はありましたか。

半藤 覚えているのは、新潟県人というのは、角栄さんは越後人というのとは違っていましたが、「日本海に沈んでいく夕日はよく見る。ところが海のむこうか

ら昇る太平洋の朝日は見たことがない。わたしは必ず朝日が見える越後にする」。

聞きながら、こんな高く険しい山を越えてくるのに、どうやって朝日が見える越後にするんだ、できるはずねえじゃないかと。

伊藤 でも実感のあるうまい表現だな。

藤井 「谷川岳をつぶす」とよくいうんですよ。

半藤 行ってましたね。

藤井 わたしが「それは神への冒瀆です」といったら怒られた。「何をいつていやがるんだ、お前みたいな東京育ちに越後の『雪』がわかるか」といわれた。

半藤 わからないですね。これは越後に育たないとわからない。わたしは戦争直後の三年間住んだのですが、このときは豪雪つづきで、本当にたっぷり雪国を味わいました。

藤井 角さんは「おれは二階から下りたりしたんだ」という。そして山のむこうの群馬と福田さんが引き合に出されるんですね。「あの野郎のところの空つ風を雨にすればいいんだ」とか。

半藤 いまでもその時の演説を覚えていますが、「でかいことをいうなあ」と思っ

て感心して聞いていました。

堀内 当時からあんなしわがれ声だったんですか。

半藤 あんな声です。名調子で。

伊藤 ほう、若い時から。

半藤 でも最初はたしか落選しましたね。

「繰り返す歴史」(戦争)への憂慮

堀内 藤井さんの写真が今週の『AERA』に出ていましたね。「安倍はうそつきだ」という見出しの記事で。

藤井 『AERA』には言ったことをそのまま書かれちゃった。いいんですよ。わたしの言ったことはみんな書いて結構ですとっていますから。

堀内 誌面ではいろんな人がしゃべっているのに、写真は藤井さんだけ。安倍をにらんでいるような強い表情の写真でしたけれど。(笑い)

藤井 『AERA』は書いてくれていると思うけれど、あの戦争を経験したものであるとして、安倍が今やろうとしていることは許せないですよ。半藤先生、わたしにはあいっだけは許せないという気持ちがある。

半藤 ありますね。わたしにも。

藤井 あの戦争でぼくの友だちが死んでいますからね。次の世界にぼくが行った時に、「お前は安倍なんか協力したのか」なんていわれてしまう。協力なんかしていないし許してもいない。

堀内 歴史ですね。「繰り返す歴史」への危惧、戦争へむかう気配というか。

藤井 歴史です。ぼくが「かれは歴史観が片寄っている」といったら、ぼくのまわりに「あいつには歴史観がない」というのがいる。

伊藤 なるほど、なるほど。ないというのはわかる。

藤井 ないのではなく、やっぱり片寄っているんだ。戦前に郷愁を持っているんです。それは少なからずあるんですよ。それをないとはいえない。

堀内 十代、二十代の若者が安倍のどこかに、何かムードのようなものに引っ張られている兆候が出ていますね、この五年ほどの間に。それがこわいですね。

藤井 それがこわい。戦前の戦争をやりだしたころの日本を評価しているんですよかれは。歴史を知らない若者たちは安倍晋三のそれに乗っかっているんです。

しかし半藤先生やぼくらにすれば、あれで戻れないところまでいってしまった、多くのふつうの日本人が殺された歴史を知っているんです。その違いです。

堀内 いま、そこへいくプロセスのきっかけの時期なんだということ、どうやったら次の時代の人びとに伝えられるんですか。

藤井 わたしは若い政治家と「昭和史」の勉強会をやってきましたが、勉強すれば歴史が繰り返されてはいけないことがよくわかります。

国際的にも第一次大戦のあとに国際協調の流れがあつて、その反動がきて経済が悪くなった。いまトランプがやっていることはその時とよく似ています。自

国優先で各国が高関税、自国通貨の切り下げをやったんですね。これに対しては寄せを受けた後進国の日独が怒り狂うことになったのが戦争の原因ですから、あれは絶対にやってはいけません。トランプは歴史がわかっていない。

堀内 国際的にも歴史の繰り返しがあつて、発端がまたアメリカですか。

藤井 またアメリカです。あの時はイギリスもフランスもです。それがこわいんですよ。

堀内 そういう国際的な方向に日本も引つ張られますよね。先の大戦の当事者であつた日本が歴史的反省の上に立つて国内でどうすればいいのか。

藤井 まずは日本の総理大臣に願いたいのは、アメリカ一国主義のトランプなんかとあまり仲良くするなということです。日本には日本独自の立場があるんです。政治家は戦前の歴史からそれを学んで命がけで守らねばならない。わたしはそう思っています。

政官界の緊張感を支えたのは派閥の力

半藤 この本（宝島社『田中角栄』）の年表をみたら、角栄さんは第一回は進歩党から出たんですね。進歩党から出てそれから民主党なんですね。わたしはずっと最初から民主党からと思っていました。

藤井 そのことでその後の角さんの話をここで少ししますとね。

ぼくらが役人をやっていたときは、まちがいなく緊張感があったんですよ。

それは派閥があったからなんです。のちにこのままの派閥政治ではダメだという話が自民党の後藤田正晴、伊東正義から出たんです。独立した別政党がなければダメだ。派閥政治をやめて外へ出よう。はじめは後藤田正晴、伊東正義だったんですが、その後、小沢一郎なんかワーツとやっちゃったんですよ。

それが新生党なんです。

その結果が今ですから、どっちがいいかはありますよ。

たしかにわたしが議員になるころは、ものすごい緊張感があった。当時の派閥の長である角栄さんにしても福田赳夫に背を向けられてはどうにもならない。そういうこともありました。角栄さんはまちがいなく福田赳夫を尊敬してました。

半藤 そうでしょうね。それで本気になって戦った。

藤井 世の中では「角福戦争」なんていって騒いでいましたが、まちがいなく角栄さんは福田赳夫を尊敬してました。

それがどうしてわかるかという、愛知揆一が死んだときに、かれを大蔵大臣にすることはたいへんなことなんです。田中派にも人物はいるんです。それを出さないで、角さんは福田さんと呼んだ。

ここに書いていますが、角さんに「福田と何とか話をしたいんだ。お前、

場をつくれ」といわれた。そこで丸テーブルにしたんですよ。そしたらあとで角さん喜んでくれて。要するに面と向かってケンカをする場でも対象でもない。丸くおさめることを角さんは求めていたからだと思います。

堀内 円卓会議ですね。

藤井 そう円卓会議です。円卓ではケンカにならない。

わたしは末席に座ってしまいましたけれどね。「福田さん、これから仲良くやっていこう」。福田さんもしぶしぶでしたけれど「そうだね」といった感じでしたね。福田さんのことは、高橋是清の弟子で、自分も大蔵大臣を務めてこのポストに執着をもっていることを知って求めているんです。

高橋是清はなんだといったら、二・二六で殺されているわけですよ。なんで殺されているかというと、陸軍をいじめすぎたからなんです。陸軍をいじめたということは、福田赳夫が先頭になって陸軍の予算を削ったんですよ。

半藤 主計局長のときに陸軍の大予算を削ったんですよ。蛮勇をふるって、といていい勇断でした。それで陸軍に睨まれた。

藤井 ここは大先生がいるからこれ以上は申しませんが。(笑い)

半藤 当時の陸軍に刃向かって予算をバツと削ったというのは、おそらく福田さんだけじゃないかな。それはえらいもんだと思いますね。

藤井 主計官でも福田赳夫は陸軍担当主計官として。

半藤 これは重要な事実なんですね。昭和七、八年のことです。

藤井 福田赳夫は何度も大蔵大臣を務めた高橋是清の命によってやっているんです。高橋是清のような偉いやつは殺されているんです。が、福田赳夫のようなチンピラは殺されない。

ぼくは福田赳夫も好きですよ。角さんはけっして嫌っていません。それどころか敬意をもっていたと思います。「角福戦争」なんていわれましたが、政界の緊張感を支えている派閥の長同士だからで、それはしょうがない。

堀内 そのへんは福田さんも派閥の長としてお互いにわかっています。

藤井 わかっていますよ。

半藤 わたしは妙なことで福田さんのせがれ、康夫さんと・・

藤井 この写真をみてくださいよ。この部屋にきています。

半藤 この人がまだマルゼン石油にいたところからの知り合いで、銀座のバーでの知り合いです。

藤井 それは結構なことです。

半藤 それから変わらざダーツと知り合いです。いまでも酒飲む会があって、この間もあつたばかりです。

藤井 ぜひ応援してやってくださいよ。わたしは福田康夫から「あんまり安倍をバカバカいわなでくれよ」なんていわれている。でもバカなんだからしょうがな

いだろう。

堀内 つい最近もテレビで福田さんは安倍のしようがないことをそこまでいうかというほどきつい口調でいい切っていました。

半藤 すごいことをいっていましたね。彼もいうときはキツパリという。

藤井 福田さんに「あんまり安倍の悪口をいわないでくれよ」なんていわれる筋合いはないんですよ。

半藤 先日もどこかの新聞で、「安倍はやめろ」という、これもものすごい勢いで書いていましたよ。

藤井 事実そうだと思います。

堀内 父親の腹の座ったところを引き継いでいるんですね。二世でも福田さんレベルの人がもつとれないと。

藤井 緊張感をなくした今の派閥からは総裁候補として表に出てくるのがいないんだよ。もちろん無派閥だっていいんだけど、どうもこのタル焼酎の醸造元の娘・・・。

山田 野田聖子。

藤井 半藤さん、これは野田聖子のオヤジのところの酒ですから、どうぞ。(笑)

い)

半藤 野田さんのオヤジというのは酒蔵なんですか。

藤井 これは少しレベルの違う説明を要しますが、野田聖子のオヤジというのは島稔と違って、中学校、高等学校のわたしの親友なんです。

そのおっちゃんが八幡製鉄に入ったんです。で、八幡製鉄に入ったときに上司が入院していたんですよ。島はその奥さんをとっちゃって聖子を生んだんですよ。親友だからあえて申し上げますが、彼は五、六人奥さんを替えているんですが、みんなしっかり離婚して結婚しているんです。戸籍上ではちゃんとやっているんです。

半藤 三木武吉とはだいぶちがうんですね。

藤井 女の方のいるところで言っちゃいけないけれど、大野伴睦は「へそから下は人格じゃない」といった。ごめんなさい、これも歴史だから。三木武吉にいたっては「お前はなんだ五人もめかけを持って」といわれて、「バカものおれは七人だ」といった。(笑い)

半藤 演説会での有名なヤジの話ですね。「お前は五人もめかけを持って何だ」とヤジられたら、「なにをいうか、おれは七人じゃ」と言い返した。(爆笑)

脇山 それって甲斐性っていうんですよ。

藤井 そう、甲斐性なんですよ。

半藤さん著の歴史ものからあれこれ

藤井 脇山さんがいないとき話したのですが、きょうは半藤先生がおいでになるんでお詫びからはじまったんですよ。もう繰り返しませんけれど、わたしの経歴を岩波で聞き書きにするといって御厨先生が始められたのに、つぶそうとした人がいたんですよ。それで半藤先生にお願いしたらご自分の社でどうですかといつてくださって。

半藤 それで文春から出るものと思っていたら、なかなか出ない。

藤井 御厨先生が怒ってくださいって、岩波にもどったんです。ほんとにすまんと思っています。

堀内 岩波のものは回想録として細部の政治的事実に裏打ちされた本格的な聞き書きなんです。われわれのほうは、お酒を呑んだり爆笑したりといった場の空気を大事にしていますから、同列には置かれたい。気にしないです。

脇山 藤井先生はお酒をめしあがりながら、甘いものめしあがるんですね、なんていう描写は出てきようがない。

山田 それではそろそろ「人形町今半」のお弁当を・・・。

半藤 まだちよつと、わたしはあまりめしを食わないおところですから。

藤井 こんな場末にまで半藤先生にきていていただいて。ここの本棚には半藤先生の昭和史もあるんだけど、幕末史、日露戦争史も・・・。

脇山 ほんとうだ、海舟もある。

堀内 海舟はとっても大事に扱われて書かれている。

半藤 おととい久しぶりに海舟さんのお墓をお参りしてきましたよ。

堀内 え、どちらに？

半藤 洗足池にあるんです。

脇山 洗足池にあるんですか。

藤井 しっかり残っているんですよ。

半藤 すっかりきれいになりましたね。以前はそこにちよこんとあっただけだったんですが、いまはあそこは大田区なんですよ、区が整備して。

脇山 この本のなかにも海舟はよく出てくる。

藤井 半藤先生はなによりも『昭和天皇実録』をよくフォローしてくださって。

半藤 いやいや。

藤井 あれ全部買おうと思ったんですけども、冊数も多く高いもので。

半藤 あれはCD・DVDが。

藤井 あ、これだ、『昭和天皇実録の謎を解く』があります。

半藤 これは御厨さんといっしょだった。

藤井 こういうものを立派に残されている。それに先生が親しい保阪さんのものが加わって。それ、『作家たちの戦争』。

山田 保阪正康『作家たちの戦争』、これですね。

藤井 作家がいかに戦争をみていたか。さすがに作家のみなさん、いいことをいっていますよ。保阪さんはこういうものをうまくまとめて残している。

半藤 保阪さんとは仲良く付き合っていますよ、最近奥さんをなくしましてね。ですからさびしいんですね、保阪さん。早くあの世に行きたくて、依頼された原稿はなんでも引き受けて、いまや獅子奮迅の大活躍、とわたしは思っているんですが。

藤井 保阪さんからいただいた本があるんです。

山田 『後藤田正晴』ですか。

藤井 いや、『帝国軍人の弁明』、これ。

半藤 それも出たばかりですよ。

堀内 保阪さんは一九三九年生まれですから両先生よりは若いですね。

半藤 そうです、若いといえれば若い。ふつう男というのは奥さんを亡くすとダメになりますね。ところがかれはかえってがんばっちゃってるんですよ。

藤井 えらい。ほんとにえらい。

半藤 早いとこ、あの世に行きたいから何でも引き受けるんだというところが。ただし、これはわたしの推察です。

脇山 あの世というのは、奥さまのいるところ。

藤井 天国。

半藤 天国か地獄かわかりませんが。(爆笑)

脇山 天国ですよ。

藤井 脇山さん、お呑みなさいよ。

脇山 バクダンをいただいています。(カメ焼酎を気にしたあと、持参したワインを手にして) これはオーストラリアのシラーズの赤です。

時代の逆風を受け政治家は根を太くする

藤井 半藤先生はどうかわかりませんが、ぼくは鹿児島の一階堂進という人を尊敬しているんですよ。そのせいで焼酎派になっちゃった。

半藤 ほう。

藤井 このおっちゃんは昭和一七年の翼賛選挙のときに、「あんな金持ちのアメリカと戦争するバカがいるか」といって負けました。ぼくはその下にいたんですよ、官房長官の秘書として。

これはえらいおっちゃんですよ。「弁士中止！」なんてきれいごとではなくて、鹿児島でなぐられてるんですよ、ふつうの人に。ふつうといっても右翼ですよ、なぐられた。でも変えなかった。で、好きなんです。だから焼酎派になっちゃった。(笑い)

こういう人間がどこにもどんな時代にもいるんですね。いまいないのになって

思うんですが。きつといるんでしよう。

半藤 いるんですかね、いまはいないんじゃないですかね。藤井先生とか、野中さんとか、二階堂さんのような人とか、こういう人はもういなくなりましたね、残念ながら。

堀内 いつの時代にもいるはずですね。中央から離れて中央を見据えている「山中宰相」ところが中央のほうは自分たちで何でもできるとうぬぼれている連中ですから、そういう人の意見を聞きにいかないし、呼び出そうともしない。

藤井 このあいだテレビ番組でのそんな内容の話で野中さんの名前ができました。

野中さんは最後までご意見は立派でしたが、そのときわたしが申し訳ないけれどひとついわしてほしいといったのは、田中角栄です。田中角栄は悪いこともやってやめさせられていますから終わりの印象が悪いのですが、田中角栄をその一人にいてやってくださいといいました。

半藤 悪いことをやったかどうか知りませんけれど。

藤井 やっています、間違いない。だけれどももっとも重要な平和についてだけは、ものすごく潔癖でした。これだけは間違いない。

堀内 根っこは大陸で受けた仕打ちですか。

藤井 たしかにディアナ・ダービンの写真を持って行ってぶんなぐられたのも事実だし、現地の陸軍のえらくもない連中にぶんなぐられたのも事実ですが、根っ

からの平和主義者なんです。関東軍を忌避していました。「関東軍っていうのは
いったいなんだ。中国大陸でものを押さえてカネをとっていたのではないか」と
いつて。これウソですか。

半藤 　むずかしいところですが、直接カネはとってないと思いますが、阿片とか
なんとかで。

藤井 　阿片なんですね。それを角さんは末輩ながらわかっていたんです。それで
「満州をやった野郎は許せねえ」というんですよ。でもわたしは岸信介の下にも
いたから言いくいんですけれどね、満州をやった岸のおじいちゃんは、孫よりは
はるかに立派ですよ。(笑い)

　　どんなことを言ったかというのと、おれは「日米安保」をやっている。アメリカ
が日本を守ることはやってもらう。しかし日本がアメリカを守ることはないん
だ。それが片務的だというんだけど、これが「日本国憲法」の現実なんだ、と
いいました。ぼくははつきり覚えています。だから自分は憲法改正論者だともお
っしゃいました。

　　いまの孫はなんですか。へっちゃらで憲法を無視している。「重要影響事態」
ならどこへでもいけるようにした。だからきらいなんですよ。安倍晋三の歴史認
識は危険なんですよ。

脇山 　安倍はトランプのアメリカのいいなりに。

国際協調の潮目がまたアメリカから反転

藤井 トランプも歴史観がないといわれる。第一次大戦が終わったときに国連（国際連盟）をつくったのはアメリカの大統領なんですよ。大戦後につくった国連（国際連合）をまたアメリカは無視しているんですよ。トランプのは商売人の末梢的なやりかたなんです。経済人だってまともならあんなやりかたはしませんよ。歴史観がないや。

大先輩に申し訳ないが、ちよつといわせていただくと、昭和一九年、一九四四年のダンバートン・オークス会議では国連を強くしよう、経済はみんなで仲良くしようとしたのに対して、歴史を無視ですよ、あの男は。アメリカ大統領の評価では四五人のうち最低といわれているんですよ。

半藤 最低でしょうね。

藤井 歴代一位はだれか。リンカーンです。八番目にオバマがいて評価が高いのに対して、四五番目くらいのレベルだといわれています。それと一体になつているのが安倍です。日米韓協力は大事ですが、あのおそこには距離をおくべきだと思います。

脇山 安倍はボチばかりやっているのに、トランプから鼻肩してもらえないじゃないですか。特別待遇もしてもらえないのにシッポを振っている。

藤井 わたしは中国もロシアも困った国で、距離を置くべきだと思いますが、北東アジアの平和というものを考えたときに、相手として手を差し伸べておかないといけない、アメリカにばかりに頼っていて逃げられたらどうするのか、ということですね。北東アジアの平和というものは、中国・ロシアも含めて成り立っているという認識がほしいと思っています。大先輩の前でどうも。

半藤 いえいえ、あまり論じたことがないところですから。

藤井 酒を呑んではこんなことばかりいっています。

半藤 いまのお話をすこし補足していいますと、第一次世界大戦のあと、アメリカが世界のトップに立ったわけですね。どこの国も戦争で疲弊したのに、アメリカは後から加わりましたからたいして損害がなかった。

で、アメリカのウイルソンという大統領が国際協調に一生懸命になって国際連盟をつくり、不戦条約をつくり、世界平和のためにやっているうちに、アメリカ国内では認められないことになってしまった。自分は世界平和のためにやったんだけれどもアメリカが認めない。だからアメリカは国際連盟に加盟しない。結局、批准しなかったんです。アメリカは自分でつくっていながら入らなかった。

ウイルソンはよほどがっかりしたんでしょうね、倒れちゃうんです。

藤井 そうです。

半藤 そのあとにフーバーという大統領が生まれて、これが国策を一八〇度変え

てアメリカ・オンリーになったんです。

藤井 つまりいまのトランプの野郎と同じです。

半藤 アメリカは損をしてまで世界のリードをとる必要はない、アメリカ・オンリーでいこうとバーツと国際協調から引いたときに、世界中がアメリカのまねをせざるをえなくなつて、わが国オンリーで保護貿易になつちやつて。その影響が世界に広がつてアメリカで昭和四年にウォール街の暴落が起きたんです。

まだ始まったばかりですが、今と同じなんです。

オバマさんが国際協調を一生懸命やつたんですが、あれをアメリカ人は納得していませんね。オバマさんが下りたあとにトランプが「アメリカ・ザ・グレイト」といつて一国主義に戻ろうとする。それにつられて世界中がそうなつちやうんですね。先生の話を少し詳しくいうとそうなんです。

藤井 そうです。いうことないな。

歴史的に第一次大戦のあとに似ているんです。

単純には言いにくいけれど、あのかきは米英仏に日独が反発したんですよ。

日独はそのときの後進国でしょ。だから戦争を起こしているんですよ。

脇山 後進国っていうのはいまは北朝鮮ですか。

半藤 いまはどこなのか。北朝鮮であり・西アジアにはイラン、イラク、トルコとかたくさんあります。

堀内 先行する途上国であるブリックス（BRICS）だって個別的になれば微妙な立場にある。

藤井 お嬢ちゃん、ワインを呑もうよ。じゃなくて、奥さま。

脇山 じゃなくて、おばあさんですよ。

半藤 北朝鮮が際立つけれど、それだけじゃないですよ。広く後進国に影響がおよびますよ。きょうもすでに話題に出ていますよ、今の状況は第一次大戦後の状況とよく似ているといえは似ている。みんなが保護貿易的になってきて。世界ががたがたしている。

堀内 個人までが広くそういう影響を受けてしまうと。

半藤 そうなりますね。

堀内 もう戻れない。見え隠れしているそういうことが、一一月の中間選挙ではつきりするのでしょうか。

半藤 トランプという大統領が、それをどう考えてどう対応していくのかはわかりませんが。

堀内 選挙に勝つためには打てる手はなんでも打つ。

脇山 つぶれないですね。

半藤 頭がいいのか悪いのかもわかりませんね。

伊藤 それ、さっきの安倍と同じで、あいつは間違った歴史観を持っているのか

何も持っていないのか。トランプのやり方からして歴史観を持っていない。

半藤 持っていないと聞いていいですね。歴史のレの字も知らない。

藤井 そのとおりです。まあ、大先輩、お酒を。

半藤 しゃべるより酒ばかり呑んでいて。

藤井 ここは酒しか取り柄はありませんから。(笑い)

半藤さんのおっしゃるとおりなんです。

ここは今をみたいせつなところなので繰り返しますが、第一次大戦後とよく似てきている。ですからトランプの方向は許してはいけないし、いっしょにやるのはあぶない。国際情勢の悪化は見る間に世界中に広がる。

堀内 国際的にも歴史は繰り返されるとわかっている人がいるにもかかわらずうなっていく。日本もだけれど、各国が歴史から学んで。

藤井 その点ではヨーロッパはよくやっている。マクロンや女性の・・

脇山 メルケル。

半藤 これは偉いよ。ドイツの戦後にアデナウアーという人物がいた。このおっちゃんの方をメルケルは継いでいる。あるときだって負けたドイツにはフランスをやっつけようという風潮が強かった。

そのときにアデナウアーは、「違う。これからの世界の平和のためにはフランスとも仲良くしなければならない」といった。

赴任先の現地言語で議論できない外交官

半藤 政治家だけでなく、わたしどもも含めてですが、日本人は国際情勢に対する勉強が足りないというか、しませんね。世界観というか独自の国際認識がないですね。

藤井 事実そうだと思う。大蔵省主計官には国際性のあるやつはいないといわれていますが、二年間、外務省にいて教わりましたよ、大河原という、北米大使を務めた、この人が人事課長だった。

伊藤 大河原良雄といえば、有名な駐米大使ですよ。

半藤 最近亡くなりましたね。

藤井 香取という人もいた。香取さんにはごちそうにもなりましたが、この人たちには外交を教わったと思っています。香取大使のほうは中国大使とソ連大使の両方をやったという絶無の経歴の持ち主で、その方が予算をとるとかなんとかやりながら外交をおそわったんです。だから大蔵省主計局で国際派だとえばれるようなやつは許せないんですよ。

半藤 これは聞いた話ですが、いつからか日本の外交官試験というものに語学がなくなりました。むかしは語学ができなければ外交官にはなれなかった。いまは語学なしで公務員試験と同じように普通の試験ですむ。だからいまの外交官は語学が

できないでも務まるそうですよ。

脇山 わたしは外国特派員協会のメンバーなんですけれども、そこに元外交官の方がくるけれど、すごく英語がへたで発音もじょうずじゃないです。いま聞いたお話よくわかります。

半藤 読めることはできるんで、むこうの新聞を読んで情報として送ってくるだけであって、なんら自分で情報活動ができないんだそうです。

脇山 現地の人と会って相対して議論することなどないんでしょうね。

半藤 いつからですか、藤井先生たちの時代からではないんですか。

藤井 すまんです。(爆笑)

香取会計課長はそんなことはなかったですよ。立派な方でした。

半藤 いつときまでは優れた人がいたんだそうですが、いまは赴任先のことばができないのに平気でいくそうです。

伊藤 そうなんですか。

半藤 だから国際情勢に対する理解が劣っているんじゃないかというのが・・・。

藤井 大先輩に注いで差し上げてくださいよ。

半藤 なにが心配とあって、日本人から国際性がどんどん失われていくことがいちばん心配なんです。

藤井 わたしなんか、ぜんぜん英語ができませんですけど、議論はやったんで

す。「日本は円を高くしろ」といつてきた。「消費税を取れ」といつてきた。そのことは朝日の裕香子ちゃんに書いてもらっていますよ。

伊藤 これですか。伊藤裕香子『消費税日記』。

藤井 それ、一年くらい取材を受けました。だけどいまの財務次官のような変な関係なんかありえない。(笑い)

マスコミの人との対決なんです。男女に関係ないですよ。裕香子ちゃんはいいいことを書いてくれているんです。

不人気の消費税に賛成した野党自民党

伊藤 消費税といえいま野田さんは？

藤井 どちらの野田？ 毅のほうね。

半藤 熊本のですね。

藤井 はい。野田毅はまっとうです。野田は消費税論者です。

その写真の真ん中に町村信孝もいるでしょう。町村はね、消費税のときにぼくにこういったんですよ。「増税に野党まで賛成することはあり得ない。自民党は野党ですからね。それをわたしはやりました」といったんです。

半藤 普通はありえないですね。

藤井 だから彼が亡くなったときに、わたしは町村の家についてね、遺体に「あ

りがとう、よくやってくれたな」って。歴史に残ると思うよ。野党が増税に賛成するなんてことはふつうはありえない。それができたのが町村なんですよ。サインしているでしょ。おとともそのことを話してきましたが。

脇山 生きていれば七〇歳ですか。

藤井 衆院議長もやっていますよ。よくやってくれた。

堀内 藤井先生の野球部の後輩だった与謝野馨さんも病を押して党をまたいで、しごとをされていましたですね。

藤井 消費税は実質的には与謝野と言いくいけれども野田毅の力なんです。その野田がいまはさされているんですよ。増税論者だということ。

半藤 それで野田さんはぜんぜん出てきませんね。税調の委員長をやったから。

藤井 おっしゃるとおりなんです。はずされちゃっているんです。ほくはいちばん偉いと思っていますよ。

半藤 そうですか。

堀内 消費税増税後の世の中の逆風をまともに受けている。

藤井 やっぱり権力者って強いですね。

でもわたしは最後まで命がけで戦いますよ。そうそう、野田毅は程ヶ谷で税務署長をやっています。ぼくらのすこし後で。税務署長をやったから財政がわかっているとはいいませんよ。(笑い)

逆でしょうね。わたしも藤沢で税務署長をやっているんです。そのころ昭和三七年にどういことがあったかという、「民商」にこてんぱんにやられたんです。

伊藤 「民商」というと共産党の。

藤井 いま共産党とも仲好くしているのはなんでだといわれますが、もうあのころの「民商・共産党」じゃないだろう、といってるんですよ。あのときは「民医連」というのもあって、医療と税金で一般の大衆を味方につければ共産党の世の中ができるという感じで。露店にいつて呑んでいたら、「おめえ署長だろう」とやられた。なんで署長が露店で呑んで悪いんですか。

伊藤 それはそうでしょうけれど、署長さんが露店まで出ていつて。

藤井 当たり前ですよ。

だつてぼくらのころは銀行なんかから借金はできないんだよ。借金は質屋からしていたんですよ。役人はいまは恵まれている、恵まれすぎているかもしれない。斉藤くんというぼくが大臣のときに次官をやったのも、「ぼくも質屋に通つていました」といつてましたよ。そういう時代なんだよ。

山田 次郎ですか。

藤井 そう斉藤次郎。あいつも質屋に通つていたんだよ。

脇山 生活のためですか。

藤井 もちろん、そうです。悪いことをやるためになんかじゃないです。入ってくるのが少ないし。

堀内 いろいろ必要があつて給料はみんな使つてしまつても足りない。貯金なんてできない。

藤井 三〇〇時間の超勤をしているんですよ。斉藤次郎のところの総務係長の女性職員が「あんた一〇時間」とかいってくる。そんな時代でしたね。山田、あなたもやらされたんだらう。

山田 やりましたよ。次郎さんとはドイツでいっしょでした。

藤井 あれはドイツ語なんかできやしない。

山田 わたしもそうでしたよ。でも楽しい人ですよ。

半藤 谷垣さんはどうしているんですか。治りましたかね。

伊藤 いえ、まだリハビリ。打ちどころが悪かったんでしょうね。

半藤 なぜあんなことをやってたんですかね。

堀内 党内でも大事なところでいて、これからしごとというときに。

藤井 あんな安倍を許してはいけないという活動を、大平さんの孫娘で渡辺満子というのがあるんですが、この人が森田一とかを集めて五、六年やっているんですよ。しょせんはそれだけですけれどね。森田一というのは婿ですね。渡辺満子がいったのは、わたし大平の取材をしていたら、何とといったかな・「リベラル

派になりました」といった。

伊藤 ほう。

藤井 おじいちゃまの取材をしているうちに、いかに自分がNTVの体質だったかということがわかりました。NTV的というのはヨミウリのことなんですよ。良し悪しを言ってるんじゃないやありませんよ。それが人生が見えてきたということなんでしょね。山田、もう少し呑んでいいか。

山田 どうぞ、どうぞ。

半藤 以前は先生はビールだけだったような気がするけれど。

山田 なかにバクダンがはいっているんです。

藤井 脇山さんのオーストラリア・ワインを呑もうや。ジャパニーズ「浦霞」を呑もうよ。

脇山 これオーストラリアの人がおいしいと言って、持ってきてくれたんです。

堀内 この部屋には本とともにいろいろな写真が飾ってありますが、机の上の壁の大きいのは、エリツインと細川さんの間に藤井さんがおられる。

藤井 この写真は大蔵大臣をやったときのです。真ん中にいるというんで。外務大臣が羽田孜だったのですが、来られなかったんじゃないかな。そのかわりにわたしが見ん中において、そばに外務政務次官だった東祥三がいるでしょ。もうあまり偉い人のは見なくていいです。(笑い)

半藤 羽田さんも亡くなりましたね。

堀内 細川さんは陶芸三昧のほかにもいろいろと。

藤井 あの写真を見てくださいよ。細川とはやっているんですよ。

脇山 ほんとうだ。

藤井 ほかにだれかというと野田佳彦がいるでしょ、岡田克也がいるでしょ。それと古本伸一郎です。

堀内 この人たちを細川さんと会わせて。

藤井 なぜ会わせたかというところ、こんなに野党がばらばらになるのは許せないと思っているんです。それをなんとかまとめるのにこういう連中がかならず力になるから、「細川さん、あなたが会ってやってくれ」といったら、「Ok」ということになった。その会です。

中国侵略の発端は「民族的な悪い癖」

藤井 細川のおっちゃんにはよく好きですよ。細川さんははっきり中国へは侵略だったといっている。中国への侵略は昭和十二年七月七日に北京の盧溝橋で始まった。一二月には南京事件、あくる年には南の広東を落としましたんですよ。これが侵略かどうかかわからないという総理大臣はおかしいと思っている。

堀内 昭和一二年の中国側でいう「七七事変」や「南京大屠殺」のあとの昭和一

三年、一四年あたりのことは半藤さんが詳しく書いていらっしやる。

藤井 そうでございますか、ありがとうございます。

半藤 ここには多分ないと思いますが、最近出版した『世界史の中の昭和史』で詳しく書いていますが、昭和二年七月七日の「盧溝橋事件」、そのあとに「トラウトマン工作」というのがありました。

藤井 はい、ありました。ドイツ大使の。

半藤 これは非常に大事な工作なんでしょうけどもあまり大事に扱われていない。

蒋介石は戦争回避にOKしたんですよ。にもかかわらず、日本という国は困った「悪い癖」のある国なんです。「日露戦争」のときもそうですし、「ノモンハン」のときもそうですし、「第一次世界大戦」のときもそうです。和平工作がはじまってそれが成功しそうだという、どこか一カ所で攻撃をかけるんですよ。そうしてそこを占領しちゃうんですよ。

藤井 軍人のやることだ。

伊藤 和平をつぶそうというか、利用するということか。

半藤 和平がうまくいく瞬間にすこしでも多く領土を取ろうとするんです。

「ノモンハン」もそう。九月に和平が進むんですが、八月くらいに精鋭部隊をダアツと南部に送って取ってしまふ。「日露戦争」のときはカラフトですね。南カラフトに上陸して占領してしまふ。和平工作が進むとどこかで動いて自分の国に

してしまう。そういう「悪い癖」が日本というか軍部にあるんですよ。

藤井 日本人の「悪い癖」なんだよ。

半藤 トラウトマン工作の場合もうまくいきそうだとおきに攻撃をはじめたのが「南京攻略戦」なんです。

はじめ大本営はこの線で止めておけという不拡大命令を出していたのに、一部の連中がチャンスだから少しでも取ろうということになって南京攻略をやった。そうしたら勝っちゃったんですね、困ったことに。だから「南京大虐殺」なんて変なことをやったのは、あれは少しでも取ろうとして急げ急げで攻撃して南京を落としちゃったからなんですよ。

落としたら勢いづいた近衛内閣が和平の条件をパーンとあげたんです。

この条件で和平交渉の席につきたいとお願いした。蒋介石に対してそれに昭和十三年一月一五日までに返事をよこせとやった。受け取った蒋介石側はおったまげてしまうわけです。前の条件と全然違った条件なんですから。まずは仲介役のトラウトマンが驚いた。これじゃあ蒋介石は受け入れられないだろうと知っているうちに昭和十三年一月一五日がきてしまう。

堀内 そこで「蒋介石は相手とせず」となるわけですね。

半藤 近衛内閣は「蒋介石は相手とせず」という有名な声明を一月一六日に発するんです。ああいうことをやったために和平工作はパーになった。

わたしも最近まで知らなかったんですが、そのときに蒋介石は大病で猛烈な高熱を出して倒れて寝ていたという。返事をするどころではなかったらしい。それを日本は戦後まで知らなかったということになっているんですが、ところがそうじゃなくて、当時の日本の新聞はそれを報じてますね、同盟通信が。だから政府が知らないわけがないんですよ。

ところが知らん顔をしたんですね。

そして「蒋介石は対手とせず」となって、これで日中戦争は泥沼になっちゃったわけです。はじめは侵略の意思がなかったのに、あるところで突然変わっちゃうんです。それで藤井先生がおっしゃる昭和一二年の七月がそうなんです。その後には漢口攻略戦もやるし、そして広東までいっちゃうんですね。

堀内 もう行くところまで行くしかない。

半藤 どうしようもないですね。和平工作なんかもうできませんね。

堀内 「民族的な悪い癖」としかいいようがないんですか。癖よりもっと痛烈な言い方はないんでしょうか。

藤井 それは軍なんですよ。ほぼ一部の軍人がやったことです。

半藤 軍とそれと大儲けしたい資本家ですね。

脇山 軍需産業。

藤井 それだけです。あとふつうの人はみんな戦争の犠牲者です。

伊藤 半藤先生はそういうときに日本は「悪い癖」を持っているという。その癖のほうは統一的な意志をもって動いてつぶしたりしているんですか。

半藤 共同謀議かそのへんのところはわからないんですが、国民のわたしたちにはそんな「悪い癖」はないですよ。けんかの和解をするのに少しでも得するところを取ってという。はっきり意図して始まるのではないと思うのですが、そうなるってしまったいくつも例がありますから「悪い癖」はたしかにあるんですね。

伊藤 統一された意志ではないけれども、ちよこちよこしたのがいて、ぶっこわしたりする。

半藤 そうというのがいるんですね。そんなとき日本の新聞社もバカじゃないからちゃんと報道はしていますね。

藤井 同盟通信だ。

半藤 国は知っていたはずですが、どこかが無視したんですかね。戦後も今になつて蒋介石が病気だったとわかったなんて歴史家が書いている。当時、新聞は同盟通信発で書いているのにな。

堀内 繰り返されてきたその「民族的な悪い癖」の発露で日本の軍が南京で起こしてしまったことは、日中間の歴史のできごととして消えないですね。しかし南京の場合にはその直前に蒋介石軍が自国の南京で相当ひどいことをやっている。合わせて軍というもののこわさを実証すべきでしょう。

半藤 日中の長い歴史を思えば、最初は国としては、伊藤さんがいわれる意味での統一した侵略の意図はなかったと思います。

堀内 「政冷」の時期にも積み上げてきた長い「文温」の絆からして、われわれが侵略的意図をもって中国とかかわるなんてことはないですし、それはお互いに理解している。

半藤 どちらにも侵略主義者なんてそう多くはないのですが。

悲惨だった日露戦を知る軍人は非戦論者に

堀内 歴史の水源まで遡ってみても、国づくりの初めからこの国はいわゆる大同社会をめざす「和の国」ですよ。

藤井 そのとおりでだと思いますが、わたしは現代のありように初めっから批判的なんです。ぼくらの友だちは戦争で死んでいるんですよ。半藤さんも中川で浮いているんです。どうしてそういう人が出たのかというところからわたしの人生観は始まっていますし、そこに戻ってくる。そこをはずしてまともな政治なんかありえないと思っています。

その発端は明らかに昭和初期にありますね。

昭和二年に日本でも「金融恐慌」が起こった。これは第一次大戦後の好況と国際協調への反動です。戦後の国際協調のあと必ず反動がくることはわかってい

るんです。戦争をやればその結果として必ずそういうことが起こって国民を苦しめることになる。

半藤 いまの先生の話に乗るわけではないんですけど、つまり日本は日露戦争に勝ちましたよね。「勝った勝った」といいましたけれど実際には勝ったわけではないですけど。そのときの戦争がいかに悲惨だったか、残酷なものであるかを知っている人がほとんどいなくなったところに、昭和八年ぐらいから日本が軍国主義に傾いていく。

藤井 それです。それが自分たちの歴史を知るということです。

堀内 日露戦争のあとその悲惨さを知っている人が年とともに少なくなる。

半藤 戦争を知らない人びとに入れ変わっていく。

ですからご存じのように、東条英機クラスは日露戦争のときはまだ学生なんです。昭和になると日露戦争の体験のある人は陸軍ではほとんどいないんです。東条がトップくらいですが、日露戦争のとき東条は陸軍士官学校をおえて一応は満州へいくのですが、奉天へ行って守備につく程度です。激戦地での体験がない。

海軍のほうはそれでも山本五十六はいますし、トップの何人かは日露戦争の悲惨さを知っています。その人たちはみんな反戦主義者、非戦主義者なんです。どちらかというとアメリカ協調主義です。アメリカと戦争する必要はないという

立場。米内光政もそうですし。ここで言いたいのは、今がちょうど同じ時期だということなんです。

堀内 たいへんよくわかります。とても重要なご指摘です。

半藤 先生やわたしのように少しでも戦争の体験がある人は少なくなりましたね。

伊藤 ちょうど谷間の時期で、戦争を知らない人の時代になる。

半藤 いまの閣僚の中で戦争を知っている人はひとりもないんじゃないですか。

堀内 いないですね。戦後七〇年が過ぎましたから。

藤井 いない。

半藤 太平洋戦争の悲惨さを知らない人ばかりが天下をとり、動かしている。

堀内 閣僚で見るわかりやすい時代認識ですね。

半藤 太平洋戦争への道というのは明らかに戦争の悲惨さを知らない人たちが起こしたもので、戦争を知ってる人たちは一生懸命やめるようにいった。

堀内 いま戦争へむかう萌芽期にあることが戦争を知っている人には見えていますが、戦争を知らない現実政治の中枢にいるひとはわからない。

藤井 ですからまた戦争への準備がはじまりますよ。生きてる人間があらゆる努力をしますよ。

堀内 藤井さんの心底からの声を聞いているような気がする。

伊藤 たしかに萌芽が見えてきた。

堀内 戦場で命をかけた人たちがばかりでなく、本土に残っていて戦禍を受けた人たちも含めていなくなります。とくに銃後で支えた女性たち。

半藤 まもなく女性もいなくなりますね。

堀内 まだご長命で残っておられる。八月一五日の「全国戦没者追悼式」に参加されている。

伊藤 そうですね。息子や夫を亡くしたという女性が。

脇山 わたしの世代ですと戦後からの意識だから、半藤さんのお書きになった「戦後のはじまり」のところを読んで、ほんとに胸が痛くなりました。うちの母は吉祥寺にいて中島飛行場の近くだったから、いちばん下の妹を産むときには、B29の攻撃の真つ最中に自宅でお産をしたわけですから。

堀内 たしかに戦後もきびしいんだけど、戦中の恐ろしさとは比べられない。

山田 われわれの学年でいうと、国民学校に入学したかどうか。

伊藤 そうだね。

山田 昭和一九年だから、戦時中の国民学校の最後で。

伊藤 ひとつ前ですね。国民学校は昭和二二年になって新制小学校と新制中学校に改められている。

藤井 戦時中の昭和一六年にんで小学校を国民学校としたのか。

山田 記憶でいうと疎開でしょうね、ぼくらは縁故疎開。わたしたちの一年上までが集団学童疎開。疎開を知っている世代までは戦争がわかっている。

藤井 疎開には行きたくなかったけどね、死ぬか生きるかなんだよ。半藤先生はもっと大変だった。大事なのはそういう経験をした人の声のあつまりなんですよ。そういう人が減ってきている。

脇山 「ほたるの墓」のアニメでは主人公の少年が餓死してしまうんですけど、半藤さんのこの本の中に書かれている山田風太郎がみた上野の駅で亡くなった浮浪者の姿は、映画ではわからない現実がよくわかりました。

半藤 ありがとうございます。

戦禍を知らない世代に平和は守れない

堀内 戦争の経験はないけれども関心を持って近づいてくる人はいいんですが、近づこうとしない人が増えていることが問題ですよね。個人的にはけっして色あせない「戦禍の記憶」を胸の奥に持っている人がいる間は外の平和が保たれるけれど、そういう経験が胸の内がない、つまり平和の時代だけを過ごしてきた人は、胸の内の「平和の記憶」を守るために外に戦力を求めることになる。

半藤 そういうことになりますね。

堀内　ですから平和の時代に生きてきた人だけになると平和は危ない。戦後七〇年、そういう時期にきているのですから、藤井先生がおっしゃるように、生きている人たちが子どもたちの胸の内に「戦禍の記憶」を伝えていくしかない。

平成の天皇には退位をなさっても八月一五日の式典には出席していただいて、おことばを述べていただく。国民の戦争忌避の意識を風化させない。外の平和を守るために平和世代に「戦禍の記憶」を世代傳承すること。

それに半藤さんのおっしゃる「悪い癖」を生じないようにすること。昭和の歴史から学んで、国民が民族の課題としてその「悪い癖」を克服できるかどうか。いまのままでは学ばずに歴史を繰り返す気配のほうが強い。

半藤　四、五年前には講演をやって終わってから質問を受けると、「日本の国を守るのに先生はなぜ武力がいらないと思うのですか」と聞かれます。

「いやわたしは武力はいらないとは言っていませんよ。いまの憲法は国の平和を守るために自衛の力を持つことは当然のこととしているんですよ」というのがダメなんです。わかってもらえない。

堀内　若い人は理解の根っここの先がその深さまでとどかない。

半藤　要するに、「いまの国際情勢のもとでは核兵器を持たないでこの国は守れないんじゃないですか」という若い人がたくさんいます。だからその都度わたしは力を籠めて答えるんです。

この国は明治維新始まって以来、上にたつリーダーのなかで開明的な人たちは、「この国は守れない国だ、守るためにはたいへんな労力がある」ということをよく知っていた。

考えてみなさい。この国はものすごく海岸線が長いんですよ。

太平洋側から日本海側まで。アメリカより海岸線は長いですからね。おそらく世界で四番目か五番目じゃないですか。ソ連は長いけれどもあれは半分以上が北極だから使えない。日本の場合は使える海岸線です。真中に山脈があつて、一〇の活火山がある。数字でいうと国土の四分の三が火山と丘陵。しかも丘陵はみんな急峻な地形です。そして人間の住める平野の部分はみな海岸線にある。これを守ろうとしたらむちゃくちゃな数の陸軍が要るじゃないですか。たかさんの若い人を集めてそんなところに駐屯させたら働く人がいなくなっちゃうじゃないですか。

ですからそれもできないでしょう。その上いま現在、日本はその海岸線に原発があるんです。

伊藤 なるほど、そうですね。

半藤 海岸線に五〇基だかの原発があるんです。

これは何も北朝鮮がミサイルを打って日本を攻撃しなくたって、静かに夜中にやって来て原発めがけて大砲をぶちこめばそれでおしまい。放射能が拡がるの

を制御できない。それで日本はおしまいなんですよ。核兵器を持って戦うといつてどこと戦うんですか、といつてもダメですな。

尾崎 戦う場があるから戦うんではなくて、人間は生きるために戦う本能がある。だからどこの国も戦争の歴史をもっているし、だれもが戦争はなくならないと思っている。防衛のためばかりでなく、仮想敵国をつくってそこに対する攻撃の軍事力を持っている。

半藤 もしという話ですよ。

もし、どういう理由かわかりませんが、何がほしくてくるのかわかりませんが、日本の国土に敵が上陸してきて、戦争をして、なんの得があるでしょうか。仮にあったとして、その時にそれに対応できるだけの自衛力を持っていること、その能力が日本にあることを外国が知っているとというのが自衛のありようで、それで十分ですよ。

こつちから攻めていくなら大きな戦車も必要ですし、たいへんな武力が要りますよな。太平洋戦争の領土拡大がいい教訓です。そんな意志が日本にありますか。ありませんよな。

堀内 これまでも、これからも、国民にはないですね。

ニッポンは地政学的に守りづらい国

半藤 きょうはひとつだけ資料を持ってきたんですが、あんまり若い人たちがそういうことをいうんで、計算して現実に見せたほうがいいんだろうと思って。

いまの防衛大学の教授ふたり、名前はあげませんが、日本がもし抑止力にする核兵器をつくるというような武力をもった場合に、むかしの陸軍のように外に出かけて、たとえば外国の港をつぶしていくというような戦力をもつとすれば、どのくらいの兵力を整えなければならないか、計算してみた資料があるんです。細かくいろいろな計算がありますけれど、現状においてはですが・・ところではいま日本の防衛費はいくらでしたか。

いまの予算でいうと、二兆か二兆五千億円。とすると、核兵器などをやるとするとその何倍にもなる。三五兆くらいないとそれだけの武力は整えられない。ということは、いまの日本の国力からいってありえますか。しかも仮に核武装すると、核不拡散条約から脱退することになり、経済制裁の対象になる。なさけない話ですが、これがリアリズムです。

こういうふういきちつと考えるのがリアリズムで、むかしの陸軍も海軍もそういう計算をしないで、大蔵省に予算としてやってもらうことをしないで、必要だからといって勝手にやってしまったからあんなふうになっちゃった。

日本の国は、国土としては地政学的には守りづらい国で、守るためには長い海岸線にはりつけるたいへんな人間の数がある。これを攻撃的国家にして外で守

ろうとすると費用は三〇倍以上になる。

ここは藤井先生に聞いたほうがいいのですが、これだけの借金のある国で三〇倍以上のかねを使って核武装ができますか。そういう計算をちゃんとしたほうがいいというんですが、若い人の中には「攻撃力があることを示すべきだ」といつて聞かない人が多いんですね。

堀内 若い人はなんで攻められるから攻める力と思うのでしょうか。この国はヨーロッパにとっては長く知られざる地域、「パーツ・アンノウン」だったし、外へ出ていく必要がないから、あの大航海時代にも出ていくことがなかった。

四季があつて気候は温暖だし、海から山からそして平地での食べ物その他が得られるから、求めて外へ出ていく必要がない。自給する程度には資源もある。これはイギリスや国境を接しているヨーロッパの狩猟民族と違いますね。国土の自衛のための備えがあればいい。

半藤 四年ぐらい前の資料なので、数字は古いかもしれませんが。

堀内 コピーをとらせていただいで。山田さん、資料はどうですか。

山田 そのとおりです。

予算も決算もなしに総力戦の名のもとに勝手にやってしまったことの間違いがよくわかります。第二次世界大戦はそのとおりです。

半藤 明治維新のときの勝海舟にしる、坂本龍馬にしるだれにしる、みんなこの

国は守れない国とわかっていた。あのころは北のほうはそれほど頭になかった。日本の国は海軍をつくって海の外で守るよりしかたがない。

そこで坂本龍馬も勝海舟も表で守るための軍艦軍艦といった。島津の殿様までも。これを基本に考えたんですね。正しいんですよ。ペリーの来訪以来これしかない。ところが国家ができて近代日本ができてみると、北からの力が強くなってきた。共産主義の勢力も出てきたりして。そうすると日本としては北からの攻撃にそなえて朝鮮半島を防壁にして。

伊藤 外で守ろうとした。

藤井 山県有朋だ。

半藤 その中心人物が山県有朋なんですね。

はじめは朝鮮と密接な同盟を結んで思ったら、朝鮮がごたごたしてよくわからない国になっちゃった。そこでいつそのこと併合してしまっただろうかということになって、併合は大問題でしたが、そうして朝鮮半島を北への防壁にした。朝鮮を防壁にしてみたら満州もあぶないというのでさらに出て行った。

結局「攻撃は最大の防御なり」という日本人のなかの哲学、軍事学がありまして、攻撃こそ防御である、国防であるということが出ていった。ある程度のところでおくつもりだったし、そうしておけばいいのに、そこに金儲けになるといので妙なものはいつてきた。

堀内 冷静に見ていた勝海舟は大陸での日本の動きに「何をやっているんだ」といつている。

半藤 勝はそうでしたね。

西郷さんの征韓論というのものはやく朝鮮と手を結んでということ、征伐するわけではないですよ。どうしても言うことを聞かなければですが、言うことを聞かせようというのが征韓論ですよ。

日本の国防というのは本気になって考えるところとお手上げなんです。守れるという人もいるんですが。

堀内 守り方についてはいろいろ考えられますが。

「日本国憲法一〇〇年」を国際的に迎える

半藤 守り方なんてそんなにあります？

堀内 守るといふか、攻められない状態にすることはできなくはないですね。

大国はここでは敬遠しておくとして、世界中の中小国といろいろな形で結んで交流をする。スポーツや国際会議や経済での交渉や観光や留学や国際病院での治療やで、まだあるでしょうが、いつも中小国を中心に外国の人びとが入りしっている。そして各地の温泉や四季折り折りの和食や風物で、「一生に四度は行きたい」という休息の場を提供する。

こんな国なら攻めて来ようがない。ひとたび大国の横暴があれば、国連での絶対的票数で排除してしまう。

もうひとつはやはり「日本国憲法」ですね。

中小国の市民の代表を広く集めて「平和憲法一〇〇年記念式典」を二〇四七年に日本主催でおこなうことを世界に宣言してしまう。そうすることで二〇世紀の不幸な戦禍を二一世紀にもたらさないことを全世界に訴えつづける。これこそ国際的にいって日本発の「平和の世紀へのメッセージ」になりますし、そういう形での議論がなんで広がらないのでしょうか。

半藤 憲法についてのそれは、わたしと保阪がかねがね言っていること。「憲法を一〇〇年もたせよう」という会をつくって、それしかないと言っている。いまのところ会員は二人だけです。

堀内 それがなんで半藤さんと保阪さんの周りのところで止まってしまっているのでしょうか。そこが問題ですよ。

どうでしょう。もっと具体的に、団塊世代をふくむ七〇〇万とか一〇〇〇万といわれる戦後平和の証である人びと、いま七〇歳の「古希」を迎えて元気でいる人びとに呼びかけて、あと三〇年、「人生一〇〇年時代」の自己実現の目標として、「この子だけは平和に」という両親の願いと付託に応えて、「平和憲法一〇〇年」を守る国民運動を展開するとか。

半藤 わたしと保阪はそれしかないといっているんです。そうすることによって世界に小さい国がたくさんありますから、小さい国が日本の憲法をこれはいいいうことで認めればいい。その前にEUができたように、ある程度は国境というものがむかしほどではなくなると考えているんです。

堀内 国境の問題となると、宗教がかかわってむずかしいですね。

半藤 宗教の問題にはぶつかる。

藤井 問題はありますがね、さっき言いかけたけれど、EUの根っこは戦争が終わったあとのドイツのアデナウアーなんですよ。東の吉田茂、西のアデナウアー。アデナウアーのおっちゃんにはいろんな評価があるけれど、ぼくからすれば、偉い人物だと思っっているんです。

このおっちゃんはなんといったかというところ、当時はドイツは負けたけれども今度はフランスをやっつけてやるうという連中がいっぱいいた。「それは違う、これからの世界の平和のためにはそんなことをやってはだめだ」といってアデナウアーはEUの根っこになるような考え方を出した。

脇山 欧州会議。

藤井 欧州会議だとかそういうものを出したわけだ。

昭和二七年から出していますよ。国際協調ではそういうことをやった先輩がいるんだよね。西のアデナウアー、東の吉田茂といわれた吉田茂も、最後の

ところは国内政治的にバカなことをやっていますが、途中ではたしかに立派なことをやっているんですよ。

脇山 どこがちがうんですか。

藤井 はじめはアデナウアーと同じです。

でもダメになったのは国内で権力を長く持ち過ぎたからです。昭和二七年、二八年まではなんとかよかったにしろ、二九年にまた強引に解散をやらうとした。そのときに副総理であった緒方竹虎が、「おまえさんが解散なんかやるならおれは一人になって福岡に帰る」といった。

これで吉田内閣総辞職になった。こういう緒方竹虎のような時代の節目で政治生命をかける人物が出ないのがなさけない。

半藤 なさけないですね。

野党とマスコミの役割は国民をおおること

藤井 与党内にダメな総裁に盾突く人物がいてほしいというのは事実ですし、それにはまず第一には与党なんです。野党がだらしなさすぎるんですよ。それに言いにくいけれどマスコミもだらしがない。

ぼくはよく言うんですが、野党とマスコミにはそれぞれに違った役割の面があるんです。与党がやらなければできないことは、緒方竹虎の例でみるようにあり

ます。それに対して野党とマスコミはあおることはできません。そのあおる力があ
るかないかが野党に問われているし、マスコミにも問われていると思います。野
党の現状は見てのとおりですし、ぼくの付き合っているマスコミの連中はそれを
一生懸命やっではいますが、なかなかできない。

それが権力なんですよ。だけどぶつつぶす。

ぼくは半藤さんと同じなだけだね。いずれは来世にいきますよ。そのと
きに、お前は安倍なんかに協力したのかといわれるのがいちばんつらいんです。
きのうもある会でいいましたよ。ぼくの友だちは戦争で死んでいる。死んだ理由
はいろいろあるにしろ、その方向を是認しているのが安倍晋三なんですよ。

それまでの日本の総理大臣は悪いことをやっているのがいっぱいいるけれ
ど、戦前、戦中の歴史の反省に立って戦後の日本としての立場は貫いている。だ
から戦後レジーム脱却なんかいつている安倍を許せない。脱却しないでいい。戦
後政治家のなかには大事な人がいっぱいいる。幣原喜重郎、吉田茂にはじまつ
て、かれのおじいちゃんも含めて。さつきから言っているようにおじいちゃんの
ほうがずっと立派なんですよ。

考えてくださいよ。それを支えてくれるマスコミの人、ここにくる若い人を
ぼくは尊敬しています。だけれども「お前の会社つぶすぞ」とまでいわれてい
る。こんなやつをいつまでも総理大臣にしておいていいのか。総理大臣が直接い

っているんじゃないですよ、今井とかの官僚に言わせている。マスコミはもって国民をあおってなんとかしてくれよ。

半藤さん、ここに戻ってしまうのは許してくれよ。

半藤 吉田さんはわたし編集者の時代に二回会ったんですよ。まだ若かったからいいように扱われましたがね。「お元気ですね」といったら、「うん、おれは人を食ってるからな」。

は？といったら、「おれは人を食っている」。(笑い)

脇山 半藤さんが広めたんですか。有名なことばになった。

半藤 吉田さんはお話のように首相が長すぎましたからね。マスコミがみんな敵になったです。吉田茂さんがやめたときに、「敵はついに倒れた」とマスコミが書いているんですからね。

藤井 そのとおりなんですよ。吉田さんについては半藤さんのおっしゃるとおりなんです。権力の座に長くいるとかならず悪いことをやる。いまのおっちゃんをはじめからいいことなんかやっていないんだから。

人間としての自衛官をつくる防衛大学校

脇山 安倍はなんでやめない、やめさせられないんでしょうか。

藤井 ムードなんです。選挙後の調査でみたとおり、国民が安倍がいいといって

いるわけじゃない。他にろくなのはいないから安倍とっている。こういう人がほとんどでしょ。五割を越している。総裁選で安倍と対抗する石破には機会を見て何度でもいいですよ。

山田 「時事放談」ですか。

藤井 でもそうですが、なんでもいいですよ。みなさんの気持ちをたいして安倍に対抗してやるようにしています。ただ石破を全面的に推せないのは、自衛官を憲法に書けということなんです。それは絶対に認められない。いまの統幕議長だつて反対のほうですよ。

初代の防衛大学長の榎智雄は吉田茂に任命されたんですが、任命されたときになんといったか、「自分は戦争の仕方なんか教える気はない。人間としての自衛官をつくりたいんだ」といつてるんですよ。この考え方をいまの連中は直接には習っていないけれど、ちゃんとわかつて継いでいる。言いにくいけれど、いまの川野統幕議長だつてそうに違いないんです。

半藤 防衛大学校にはけっこういるようです。

藤井 ほんとうですか。ありがとうございます。うれしいな。

半藤 けっこうあそこの人と付き合うことがあるんですが、みなさん日本はそんなに集団的自衛権であつちまで攻めていくような兵力は必要ないという。

藤井 半藤さんにそこまで理解していただいてありがたい。ほんとうにそう

なんです。

半藤 もうひとつ言ってみましたよ。

わたしたちは自衛隊ができてから一生懸命にいかにしてこの国を守るかという防衛戦争の研究は山ほどしてきたけれど、ところが、よその国へ行って攻撃するなんていうことをやったことはいっぺんもない。

藤井 半藤先生、それはほんとうにうれしい話だ。

半藤 ほんとうにないんだとはっきりいってましたよ。

藤井 そのとおりなんです。このことをもし憲法に書いたら、新しい自衛官になった連中はおれたちは国を守っていて偉いんだということに必ずなる。そうするとかつての帝国軍人と同じ人間ができる。中の人間がちゃんとやっている。誰かは言いにくいからいいませんが、ちゃんとやっているんだよ。

伊藤 なるほど、そうですか。

藤井 それはいまの自衛官のうちまっとうなやつは本当にそう思っている。

堀内 憲法九条に書き込んでしまうことによって起こることですね。

藤井 二〇年といわない一〇年で、自衛官になったやつはおれたちは偉いんだ、日本を守ってきたのはおれたちだとなる。

そうじゃないでしょう、みんなで平和を守ってきたんでしょ。きのうもある講演でいいましたよ。平和を守ってきたのは自衛官だけじゃない。世の中の人

みんなが守ってきたんですよ。いちばん守ってきたのはここにいるみなさんではないか。自衛官もまっとうなやつは知っている。

半藤 それを知って自衛官になっているのですからね。

堀内 そういふまともな意見がもう少し外へ知られて、世論調査のところに表れてくるようならば、安倍支持がもっと下がっていいはずなんです。

半藤 いや、それがわかりませんね。

藤井 わかりませんが、ぼくは命がけでやっていますよ。何度でもいいますけれど、いずれ来世にいったときに、お前はなんだ安倍なんかを許していたのかといわれたら立つ瀬がない。

脇山 地獄に送られちゃいますよ。

半藤 藤井先生はわたしよりいくつ下でしたかね。

藤井 わたしは昭和七年ですから。

半藤 そうすると二つ下。

藤井 半藤先生はもっと厳しいでしょうが、わたしの友人たちは防空壕で焼夷弾の直撃で死んでいるんですよ。小学校六年で。思いはそこに戻るんです。

堀内 藤井先生の心の奥に詰まっている真情ですね。

藤井 それだけなんだよ。安倍の野郎をなぜ怒るかというと、将来、ぼくの友だちのように、これからの人が犠牲になる可能性があるということなんだよ。

堀内　そこですよ、大事なことは。これからの人が犠牲にならないこと。

お二人の貴重な対話は、歴史の実際の深いところに接していますから、同時に将来に現実となるありようの萌芽に触れていると思います。若い学生たちが、先人が捉えている将来の現実への萌芽を、みずからの問題として捉えて、サークルなんかで議論してくれるといいのですが。

藤井　それは半藤さんにだって見えていますよ。中川で浮いていたんですから。

中川に浮いていた人がこんなところで平和に酒を呑んでいる。(爆笑)

半藤　この酒はうまい酒ですね。

中川に浮いて泳いでいたんですけれど、まわりで足をひっぱられたり手をひっぱられたりして、浮いたり沈んだり、浮いたり沈んだり。

藤井　そういう人がこうして元気でおられる。うれしいですよ。

半藤　夜の水の中というのは、どっちが表か底かわからない。一メートル五〇センチぐらいのところ、溺れ死ぬ人がいますよね。立てばいいのにと、思いますよね。あれが横になってあつぷあつぷしているとわからない。まわりにたくさんいるからみあいになる。

藤井　中川だからよかったですよ。隅田川ではみんな死んでいる。戦後に「りんごの歌」を歌った並木道子の両親は隅田川で亡くなっている。

堀内　衣類は着たままでしたか。

半藤 着たままでしたね。

途中でカチカチ山の狸になりまして、背中に火がついたんです。防空ずきんをかぶって鉄兜をかぶっていたんです。それをぜんぶとって、鞆も捨てて、燃えているちゃんちゃんこを脱いで、学生服ではないけれど着たままになりました。長靴をはいていたんです。それで助かったんです。

「双葉山敗れる」騒ぎの裏で進んだ戦時体制

藤井 いまの連中が「バカ騒ぎ」して楽しんでいる、同じなんだよ。ぼくらだつて「双葉山敗れる」でわあわあやっていたんだよ。

半藤 「双葉山敗れる」はみなさん覚えているでしょうが、有名な話ですから。安芸の海が双葉山を倒した大一番で相撲が終わったと思つていますが、ところがあのあとに男女の川と玉の海という結びの一番があつたのですよ。だれもそれをいわないんですよ。

わたしは玉の海を応援していましたから、「双葉山敗れる」はどうだつていいんですが、ラジオも興奮しちゃつて。

藤井 みんながそんなことに興奮していた時代に着実に世の中は悪くなつていった。「双葉山敗れる」は昭和一四年の一月なんです。そのころ何があつたか。前年に「国家総動員法」が制定され、そして一四年に「日米共同防衛体制」をやめ

る。一六年には小学校が「国民学校」になる。

堀内 それは決定的な変化の時期でしたね。

半藤 中国大陸では「勝った勝った」。実は「勝った勝った」ではなく、攻勢終末点に達していて、どろ沼の戦闘になっていた。日本の大衆はそう思っています。それから、双葉山が七〇連勝に向かっていてのと帝国陸軍が連勝連勝で進んでいくのと同じ勝利だということでみんなしてわあわあやっていた。

藤井 そのとおり。ぜんぜん違った。

第二次大戦だって「ミッドウェイの海戦」で負けていたんですよ。そのときにシンガポールが陥落したというので「わっしょいわっしょい」やっていた。そんなとき思い合われるのが二階堂進なんです。二階堂は「おれは一〇年アメリカにいたけれど、あんな金持ちと戦争するバカがいるか」といつていた。こういう冷めていたのは少ないんだよ。

堀内 少数ですが冷めた政治家は残っていて、戦後に活躍した人もいます。

藤井 二階堂は昭和一七年の選挙には落ちましたよ。大野伴睦も落ちました。やっぱり平和主義者だったのね。鳩山一郎とか河野一郎そして安倍寛は勝ちました。

山田 安倍寛は『安倍三代』の。二階堂さんは落ちたんですか。でも六十何人だけは通った。

藤井 大野伴睦は落ちた。このあいだ岐阜へ行ってその話をしたらね、ほんとで
すかという。落ちたというのが偉い。

半藤 翼賛選挙ですからね。非推薦議員は全員落ちるのではないかと思っていた
らそうではなかった。孤軍奮闘で当選した人もいた。

藤井 今そういう政治家がどれほどいるか、いてほしいんだよ。

半藤 中野正剛は入った。

藤井 入ったけれど自殺したでしょ。東条英機とけんかして。

半藤 わたしのおやじが、つまんないおやじですけど、東京都会議員の選挙に
非推薦で出て落っこちた。

藤井 それは立派だ。

伊藤 落ちたにしても、よくがんばって出たですね。

半藤 出ましたね。非推薦ですね。まわりが止めるのを振り切って。

藤井 それが半藤さんの血に入っている。

半藤 わたしは政治が嫌いですから。

藤井 政治は嫌いだけど、正義に味方している。ほんとうですよ。

半藤 それまで向島で運送業していて区議会議員だったんですけど、こんな時
だからこそ都議会議員に出るといって。非推薦議員で出て落っこちた。

脇山 この『歴史と戦争』に書いてある。「運送業をやっていて、『お前の人生も

短かかったな』。おやしは変だった」。 (笑い)

半藤 変なおやしでした。日米戦争開始の日の、一二月八日の日の朝のことばでした。

藤井 そういう立派な先輩がいたんだよ。

脇山 先が見えた方だった。

藤井 ここでも繰り返すけれど、ぼくは二階堂さんが偉いと思うのは、現実の世相とは違うところで冷めて時代を見ている。

半藤 そこに書きましたが、石原莞爾がそうなんですよね。昭和一六年に陸軍から追い出されちゃう。

伊藤 石原莞爾も追い出された。

半藤 非戦論者ですから。中国との戦争なんかなぜやるんだといって、東条一派に追い出された。かれはしょうがないので大学の先生をやっていて、アメリカと戦争がはじまった瞬間に、日本は一〇〇〇〇円しかかねがないのに一円の買い物をした。ところがアメリカは一〇〇万円持っていて一円の買い物をしている。

これどつちが勝つと思うと教壇で平気でいっていた。

堀内 二階堂さんとは表現は違う。

藤井 二階堂さんと同じなんだ。それでも戦争をやったバカがいるんだよ。いまもこわいよ。

公正中立の軸を見失った国家公務員

半藤 お会いできたのでちよつとお聞きしておきたいのですが、いまの財務省はなぜあんなになつちやつたんですか。

藤井 ダメですよ。まずあんな佐川のようなのが出ることがダメですよ。許せない理由はふたつあります。

ひとつはですね、政局に協力するなということ。政局に協力してはいけないのです。この話はいつかしたかもしれません、竹下登の秘書官をやっていたときのことですが、竹下さんは「おれたちはこれから佐藤つぶしをやる。きみらは帰れ」といった。それが筋なんですね。これがひとつ。

もうひとつは、公文書というのは歴史そのものなんです。歴史そのものを直すということ。これは絶対にあつてはいけない事態。こういう意味において、わたしは佐川を絶対に許しません。

半藤 よくわかります。

藤井 それに対して文科省の前川喜平は偉い。あれはいろいろ言われたかもしれないけれど、自分はこういうことは正しいといった。官僚として自分のやっていることを正しいといえるかどうか。これを見習えといいました。

実はぼくは佐川という男を知らないのです。渡辺美智雄のとき、大蔵政務次

官をわたしがやっていたときに入省したのでわかりませんが、その上のものについてのは、こういうふうには政局になっちゃっていることがわかったら、少なくとも国税庁長官になるのは断れといいました。直接知りませんから上のものにそういいました。そういう気持ちですね、わたしは。

公務員というものはどんなときも公正中立でなければならぬ。

半藤 ええ、ええ。その通りです。

藤井 公正中立というのは筋の通った与党の政策に協力するのはいいけれども、政局になったときには距離をおけということだとわたしは思います。

半藤・伊藤 なるほど。

堀内 それは官僚全般に対してですね。

藤井 全般にいえませう。この点については同じだと思います。ぼくは後藤田正晴の弟子ですが、後藤田が厳しくいったことは、「公務員は常に公正中立であるべきだ」ということ。いまその公正中立ということは、安倍なんか協力するやつはダメだということですよ。

これは政局ですから。政局と政策は別なんです。

半藤 なるほどね。

堀内 半藤さんのご質問に添ってですが、大蔵省とあえていわせていただきますが、大蔵省のときにきちんとそのへんのところができていて、いまの財務省がこ

ういう体たらくになったのはなぜなんですか。

藤井 それはもちろん政治家と官僚の関係ですが、世の中自身の問題だと思えます。世の中の変化のありようが政治家と官僚の関係に現われているのだと思えます。ぼくはその両方にかかわってきました。

公務員としては、田中角栄のもとで動いた時期があつたのですが、そのときには派閥の長の力というのがすごく強かった。たとえば福田赳夫グループから具体的に「お前あんなバカなことをやったらいけないよ」という言い方はされませんが、田中がけしからんなんて決していいませんでしたよ。

わたしは弊害があつても派閥と政策のそういう緊張感はいせつだと思つて
いるんです。

で、言いにくいですが、政治家になつてからわたしが小沢一郎といつしよに新生党に出たのは、派閥同士でそんなことをやっているよりは、別の党になつて政策としてきちつとそれをやるのが筋ではないかという考えからでした。

それを強力に主張したのは後藤田正晴、伊東正義なんです。どういふことを
いったかという、いまやっているのは派閥の争いだ、その結果どういふことにな
るかという、結局は国民の負託を歪めてしまうことになる。

そのことはわたしの経験でいいますと、私は消費税論者だけれど、地元のお
じ自民党の相手は消費税反対だ。ふたりが当選して東京に帰ってくると、そのお

っちゃんも消費税に賛成しろといわれる。つまり後藤田正晴と伊東正義がいったことは、党内の派閥争いは有権者を裏切るのではないか。

政治家として若かったわたしはそれに単純に乗った。そのときぼくは後藤田正晴、伊東正義に乗りました。小沢一郎ではありません。結果としては小沢一郎ですが。つまり党内の派閥闘争ではだめなんで、別の政党によって有権者に訴えて政治不信を是正をすべきである、という理屈に乗りました。若いころでございましてので、申し訳ありません。

伊藤 いえいえ。

藤井 結果はごらんとおりです。無党派層を増やしただけ。

伊東正義というのは大平派の重鎮です。後藤田正晴というのは田中派の重鎮です。いま自民党には政界を再編して新しい政党によって改革するという方向の動きはありませんが、自民党が「安倍一強」から脱け出て将来を見据えた政策によって有権者層を回復できれば、忖度する官僚を公正中立の本筋にもどすことができる。この方向で動く可能性はあの党にはありますね。

半藤 そうですか。ありますかね。

藤井 竹下派なんかはその方向でいくと思います。

半藤 いまのところ竹下という人はいまいな対応をしながら安倍を擁護するようないような位置にいる。

藤井 可能性であって、わかりません。自民党だってそれほど単純で愚かな連中の集まりではないですよ。

半藤 わたしもそう信じているんですよ。

藤井 わたしも信じている。(爆笑)

藤井 いまの自民党が嫌いなのではなくて、安倍晋三が嫌いなんだ。

脇山 安倍以外ならだれでもいいとよくおっしゃる。

藤井 だれでもいいです。無派閥でいい。ぼくのつきあいは無派閥ですから。だれでもいい。安倍晋三以外ならだれでもいい。何党でもいい。(笑い)

安倍昭恵夫人という人のこと

半藤 三、四日前におもしろい話を聞きました。おもしろいというか、くだらないといえばくだらないんですが。わたしのこの『歴史と戦争』を出してくれた幻冬舎というと、みんなバカにしている出版社ですが、そこから本を出したんだからお前もそうとうバカじゃないかといわれるんですが。(笑い)

脇山 けっこういい本も出していますよ。

半藤 その編集者と一杯呑んだんですが、そしたら安倍さんの奥さん・

脇山 昭恵さん。

半藤 昭恵さん。安倍昭恵さんの自分の一生というような形で幻冬舎が出そうと

いうので、ライターが徹底的に昭恵さんに聞いたんですって。森友・加計問題が起きる直前くらいまで。このモリカケ問題が起きたんで、幻冬舎の編集者は本がおもしろくなるというんでむしろ喜んだ。

脇山 売れそう。

半藤 それでライターが一生懸命まとめて安倍昭恵さんのところへ原稿を送ったんですって。そうしたら安倍昭恵さんという方は、自分がしゃべったことがこういう原稿にまとまったときに一字も直せないんだそうです。つまり自分がしゃべったことを忘れちゃうんじゃないかというんです。(笑い)

山田 これはすごい。

脇山 そういう人だと思う。

伊藤 若年認知症だな。

半藤 「一字も直さないでこれで本を出していいんですか」といったんだけど、要するに朝起きて歯をみがいて顔をあらって朝ごはんを食べて学校へ行きましたといった調子の話でしかない。これでは本を出す意味がない。「ここで自分が何を考えたかを入れてください」とお願いしても、一字も入ってこないし、一字も直してこない。

これではしようがないんでまた会いにいつて、「ここではどんなことをお考えだったんですか」と聞いても、全然ダメなんですって。反応なし。あの方はいろ

んな問題を起こしているけれど、自分でやったことがわからない人じゃないか。ゲラを見るとそう思える。で、本にならない。

堀内 さすが売り上手の幻冬舎でもそれでは本にできない。

半藤 幻冬舎も、本にならないというので、これは無駄打ちだったかと。

伊藤 だからいつでもここにこできているんだな。

半藤 にこにこしていればいい。実はなかなか意味深な話で、ということとは、あの人は自分が総理大臣の夫人だということが何を意味しているのかがわかっていないんじゃないか。ただまわりからちやほやされて神がかっている女性であつて、自分でものを考えることができない。

だから「証人喚問」なんかに呼んだって国民が唾然とするだけではないか。

安倍はそれをわかっていて、いやだと言っているんじゃないか。

山田 そこが重要なところなんですね。

半藤 ええ。とにかく幻冬舎の編集者がいうには、わけのわからない人で、少しくらい自分の意見があるかと思うと何も無い。「ご自分でたしかにおっしゃったんですよ」といつても、「はあ」といつてそれっきり何も無い。

藤井 そうなっちゃったんじゃないかな。あえて守ってやるとすると。

脇山 生来そういう人だった。

堀内 そういう人だったところにファーストレディになったことでもう何も判断

できなくなった。

脇山 ファーストレディになる前から。

堀内 そうでしょうね。気質は前から。

半藤 前からでしょうね。野党は「証人喚問、証人喚問」といつているけれど、あれは知らないでいつているからで。(笑い)

脇山 何をいいたすかわからない。

半藤 国民はちんぷんかんぷんになる。聞いてもなにもわからない。

山田 出さない、というか、出せない。

半藤 だから本も出せないというのが幻冬舎の編集者の話です。「それでは国会に呼んで本筋のことを聞いてもダメですね」と聞いたら、「ダメにきまっています」。首相が答弁で「うちの妻はいつておりません」というのは本人に聞いているのかもしれませんが。「そんなこといったかもしれないけれどいつてないかもしれないわ、でもよくわかんない」てな答えで。(笑い)

伊藤 それは病的なものなのかな。

半藤 それはわからない。意図してとぼけているのかも。いや、たしかに神がかっている。(笑い)

伊藤 意図してやっているとしたら、これは相当の大物ですな。

半藤 意図してやっているとしたら、本当の大物です。すごい大物ですよ。

脇山 わたしもかねがね思っていたのは、わたしが昭恵さんだったら、「こんないやな思いをするのはもうやめましょう」といいますよね。

藤井 そのとおり。

山田 そのくらいのことを本当はいうよね。

半藤 だから人間の恥とか意地とか理とか義とか、そういうのはまったく人らしい。この話は笑い話ですが、「原稿はあるの」と聞いたら、「ある」というので、「そのまま出したらどうだ」といったら、「売れないし、出したらこちらの恥になる」。(笑い)

伊藤 どこからそんな原稿の中身が洩れたらどうなります？

半藤 笑い話としてでなく本の中身が洩れたらたいへんなことになるでしょうね。

堀内 ここでの笑い話としても文字化しづらいくらいの話ですね。

山田 文字化してあるんだし、出てもおかしくはない。

半藤 幻冬舎の書いたフリーライターにかねは払ったのか聞いたら、「それは払わないわけにはいかないから払いました。けれどなんにもおもしろくなかった」といつている。

脇山 ライターにしては終始つまらなかつたでしょうね。

堀内 出版元としての最初のアイデアとしては悪くなかつた。

半藤 さすがに幻冬舎は目の付け方はいいですよ。話題になる前に、承諾はとったんですね。そこまではよかったけれど、あとはむだ働きだった。(笑い)

山田 これは驚きましたね。

半藤 日本の総理夫人がそんなふうであることが外国に知られたらたいへん。外国にはいっしょについていくわけでしょう。

脇山 メラニア・トランプのほうがまだいいですね。何もいわないから。

半藤 ところが昭恵さんは外国でもおしゃべりなんですってね。

堀内 むこうに日本語のわかる人がいると問題でしょうね。

山田 通訳も困るでしょう。

半藤 多分、通訳は知っているでしょうね。

藤井 知っているでしょう。

伊藤 そうか、両方わかるわけだから。

脇山 それらしく翻訳する。

伊藤 それはむずかしい。

半藤 通訳は勝手に訳せばいい。たぶんこういうことをいっているんだろうと。

堀内 これこそ「外交」ですよ。これなら外務省もできる。

山田 それはすばらしい外交です。

脇山 そうですよ、通訳は外務省なんですから。

山田 いかようにも膨らまして。

「民族的な悪い癖」の歴史検証が優先事項

伊藤 半藤先生にちよっとおうかがいしたいのですけれど。

さつき戦闘をやっていてここで和平をしようというようになると、ハードルを高くなんかして、ぶちこわしをする。和平をしようとしていた人にとって本旨に反するわけですよ。もうひとり大親分がいて、結果をコントロールするとかではなくて、ちっちゃいとこで小者がちよこちよこやってこわしてしまおう。

半藤 「日中和平」のことでいえば、小者がごちゃごちゃやってぶっこわしたんですね。肝心かなめの参謀本部の作戦課は和平を結びたかったんですから。

伊藤 そこです。大親分である参謀本部も裏切られた。

半藤 どういうわけか、あのときは近衛内閣がやる気まんまんでぶっこわしちやっただけです。ですから参謀本部の作戦参謀の一人に秩父宮さまがいて、和平ならずとなって秩父宮さまが号泣したという話が残っています、文字としてね。大元のほうは和平をしたかった。ところが内閣の強硬派のごちゃごちゃのほうは勝手にやっただけです。

伊藤 「盧溝橋」もそうだし、これはだれかから聞いたのか本で読んだのかしたのですが、「南京虐殺」のときもそこで収めるというところが、海軍が最初に攻

撃に出た。それから二、三日してから海軍にやられてたまるかということで陸軍がやって結局、南京の大虐殺が起こった。

本来ならあそこで止めておこうというのが、日本の政府なり軍のトップの考え方だとすると、それよりはるかに次元の低い小者が騒いでぶちこわしてしまうという「悪い癖」の例がいくつもあった。

半藤 あったといえるでしょうね。

いまの話の「盧溝橋」もそうなんです。

「盧溝橋事件」は藤井先生がおしやったように七月七日にはじまりましたが、七月九日ぐらいにいつペン和平になったんです。蒋介石軍と停戦協定を結んだんです。ですからほんとうはあそこで戦闘は終わったはずなんです。日本はやる気ないですから、盧溝橋はこちらから仕掛けたのではないですし、蒋介石もやる気はない。両方でやる気がなかった。

だれがやったのかはわからないのですが。弾を打ち込んだのがどっちかということは今もって正体がわからない。蒋介石軍のほうからしかけたことはありえない。といって日本軍がやったということも金輪際ありえない。したがって最初の衝突は思いがけないことだった。

それが二日ぐらいあとにいつペン停戦協定になったんです。

伊藤 なったんですか。

半藤 はい。で、まさにこれから停戦協定から和平交渉がはじまって文書を交換する直前ぐらいまでいったんです。そのあとは日本が悪いんです。牟田口廉也大佐が連隊長なんです。あれが手柄をたててやろうというんで、またこれどっちからかわからない弾が撃ち込まれてきたといって攻撃を再開してしまっただけです。

ですからあれは七月七日にはじまったといいますが、正式にはじまったのは十何日です。ほんとうに撃ち合ってしまったのは。あのときは牟田口廉也なんです。そのとき牟田口廉也の上にしたのが・

藤井 河辺じゃない？

半藤 そうです河辺正三少将。

河辺は止めにきたんです。止めにきたんですが、牟田口とにらみ合って、「おれたちは許せないから、やらせてくれ」といわれて、河辺はついに止められなかつたんですね。それではじまっちゃったんです。それが事実なんです。

日中戦争そのものは実は七月七日はどっちが一発を撃ったかわからないんですが、そのあと和平協定を結ぼうとしたところで戦争を始めてしまったのは日本側なんです。歴史というのはそういう小さいところで始まるのですが、いつの間にか七月七日に始まったことになる。細かい事実が出てこないんですよ。消えてしまいうんですね。

堀内 事変のきっかけをはっきりさせるには、ほんとうはそういう小さなことが

大事なんですが。

半藤 ほんとうは大事なんです。「南京事件」のほうも、いまいった海軍の爆撃のあと陸軍が追撃したのは事実ですから、陸軍が海軍の爆撃のあと海軍に負けるもんかと出ていったのはウソではないんです。でも、その根元にもっと大事なことがある。

伊藤 そんなレベルの問題でことが大きくなってしまおう。

半藤 ことが大きくなったというよりせっかく和平を結ぶほうへ行こうとしているのに、それを政府や軍中央がふつとばしてしまうのですね。とにかく近衛内閣がやる気満々だった。

藤井 そうです。

半藤 あれがよくないですよ。

参謀本部の人たちがちゃんと文書を残していますけれどね。なぜ軍のほうが和平をしようとしているのに政府がこんなに好戦的になっているのが不思議でしょうがないという文書が残っていますから。

伊藤 戦争の現場というのはどちらかというところと偶発というレベルの違う問題でやっちゃったということになる。

堀内 その「民族的な悪い癖」ともいうべきいくつもの事象を検証することなしに、日本の将来の軍隊のありようは語れませんですね。

半藤 それを現在の話にもどしますと、自衛隊を国防軍にするということは将来その恐れがあるということなんです。独断専行がある程度許さないと軍は動きがとれない。いまの日本国民は、将来のそれを承知してやっているんですかというのがわたしの論なんです。

山田 まったくそのとおりです。

軍隊とは独断専行するもの

半藤 軍というのは、いまの自衛隊は、日本の刑法とかの現在の法律できちんと押さえているわけです。縛っているわけですが、国防軍にしますとある程度は独断専行させなければ軍は自由な作戦行動はとれないんですよ。いつも内閣の許可を得てからやるというんでは間に合いませんから、軍はある程度は独断専行する。

それが間違っただけではないかといって裁くのは軍隊だけの法律、つまり軍法をつくらないと裁けない。軍法というのは軍事法廷ですから、一般に公開しませんから、てめえたちの形でやるわけですね。刑法や民法とは関係ない。

ですから「盧溝橋事件」であろうが、「張作霖爆破」であろうが、「満州事変」であろうが、あえてやろうとすれば軍事裁判にかける、実際はどれもかけていませんが、仮に開かれたとしても一般に公開しませんから、裁判長を勝手にた

てて無罪無罪無罪無罪というふうになる。こうしないと軍というものは動けないんですよ。いまのお話の「南京事件」にしる「ノモンハン」にしるなんにしる、みんな出先の軍が勝手に動いたんですよ。いわゆる統帥権なんかあつてなきが如しで。それが事実なんです。

本に書きましたが、昭和天皇が本気になって怒って、なぜ「満州事変」を起したのか、あれはわたしの許可なしで起こした事件であるから、したがって軍事裁判にかける、国家に対する反逆であるといったらしいのですが、軍は裁判を開かないどころか、嘘の報告をして天皇をなだめてしまった。いまになると、裁判をなぜ起こせなかったのかといたくなります。死刑までいかなくとも、軍役からクビにするとかね。

ところがみんな凱旋將軍なんですよ。石原莞爾にしる板垣征四郎にしる本庄繁にしる。本庄繁などは凱旋將軍で帰って来て、栄転して侍従武官長ですよね。のちに男爵になる。

こういうことを許さなければ軍というものは動かないんですよ。

国防軍にしたらだれがこの強大な軍隊を統率するんですか。安倍さんですか。

伊藤 うーん。そうですか。

藤井 それがいちばんの根っこの話なんだよ。

山田 これはきょうの一番大きなキモの話ですね。

伊藤 軍は軍で独自に動いてしまう。

半藤 軍は軍で動くことを許してもらわなければ本気になって戦えない。これは痛切なる思いなんです。

藤井 伊藤さんも知っているように、ぼくの親戚筋に田中義一がいるんだけど、田中義一は、昭和天皇に「お前のつらは二度と見たくない」といわれたんだよな。これは事実なんだよ。言いにくいけれど、田中義一は悪いやつなんだよ。あれの下のが・・・。

半藤 河本大作ですね。

藤井 河本大作がサポートしたのが昭和一〇年に殺された永田鉄山。つまり軍の統帥権なんだよ。

半藤 それが国防軍というものの生命線なんです、彼らにとっての。統帥権をだれが握るか。

伊藤 まさに実質統帥権。

半藤 実質統帥権ですね。いまの統帥権者は形としては内閣総理大臣ですよ。それは安倍さんですよ。安倍さんにできますか。わたしはあの人がやるなんてとんでもないと思いますね。

藤井 それより問題は稲田だよ。あんなやろうが何で防衛大臣になったのか。防

衛というのはシベリアン・コントロールの根幹でしょ。それを稲田なんてのに任していること自体が問題。ぼくはそう思います。

脇山 全然理解していませんね、安倍さんは。

藤井 だって後継者だったんだから安倍の。女性だからいっているのではないですよ。

脇山 知ってますよ。(笑い)

半藤 理解していませんのではなくて、何も知らないんじゃないですか。

伊藤 安倍さんがとにかくこの国の総理をやってるわけですから。軍というものが本質的にそういう癖とか性格を持っているもんだということがわかっていながら、上に立ってそうしようとしているんですよ。

藤井 安倍は軍というものを何も知らないんだよ。

半藤 厳密にいうと、イギリスでもフランスでもとくにアメリカ大統領はすごい権限をもっていますからね。シベリアン・コントロールが効いているんですよ。

トルーマンがマッカーサーをクビにしましたよね。

伊藤 そうそう。

半藤 わたしたちは、「え？ マッカーサーがクビになるの」といって驚いたくらいにシベリアン・コントロールがあるんですが、それは大統領を囲むしつかりとしたものがあって常に会議をして、それが補佐をしているわけです。日本もそ

れをまねしたいというんでしょ。安倍さんを囲んでいる連中というのはいろんな人がいますけれど。

伊藤 なかよしグループ。(笑い)

藤井 なにより稲田ですよ。これを大臣にしたことがシビリアン・コントロールができない根源ですよ。

半藤 女性の防衛大臣がハイヒールをはいて。そんな人が軍をコントロールできるはずがない。女性がなったっていいですけれどね。

脇山 おそろしい話ですね。ハイヒールをはいてコツコツやって。

藤井 問題は任命権者ですよ。

伊藤 シビリアン・コントロールがいかにもろいかというのは、このあいだの情報が出てきたとか日誌があったとかなかったとか。

半藤 あれでよくわかりましたね。

藤井 小野寺になってから出てきたでしょ。稲田のときには出てこなかった。あれはバカにしきっていたことで。

半藤 現場が相手にしなかった。格好だけの大臣なんか。

藤井 小野寺になって、ふつうのやろうが来たな。これだけの違いだと思えます。

半藤 軍とはそういうものですよ。

藤井 ぼくもそう思う。軍とはそういうものです。こわいよ。

半藤 そうです、そうです。こわいです。「軍による安全」ばかり盛んに強調されますが、「軍からの安全」も考えなけりゃいけないのです。どこの国でもクーデタは軍が起こしていますよ。

どうしてアジアのあんなところが戦場に

伊藤 もうひとつ、現場の話をしあげると、たとえば日本が戦争をやっていたとき、ガダルカナルがありルソン島がありました。

わたしも海外協力を二五年間、国際協力事業団にいてやったものですから、アジアではほとんどかつて戦争をしたところ、戦場だったところへいったわけです。そこでまあ迷惑をかけたからばかりではないのですけれど、むこうの国造りに協力するということが、賠償の形で経済協力、技術協力で出たわけです。

国造りのために協力するという形で実際に現場にいったんですけれど、たとえばインパール作戦とかパプアニューギニアの戦争の現場にいったのですけれど、そこにいってみると、半藤先生の本にも書いてあるけれど、実際に何万という人たちが死んでいるわけです。半分以上は戦死じゃない。餓死かうじむしに食われながら死んだんですね。

そんなところでなぜ戦争をやったのか。食料は向こうへ到達するまでに欠け

ちやうのような装備で。インパール作戦なんかまさにそう。それからパプアニューギニアのポートモレスビーにいくという作戦。

ソロバン勘定じゃないけれど、これだけやったらこういうものが必要でこうなるということは、軍事効果としても当然司令官の頭のなかにはあると思うけれど、そんなうじむしに食われながら仲間が死んでいくようなことを、わかっていてなぜやったのか。

半藤 おっしゃるとおりで、なぜやったのかと問われれば、なぜやったのでしょうかと答えるしかないのですけれど。

ひとつには何べんもいいますけれど、日本の国は地政学的に守りづらい国であると同時に資源がないんですよ。資源がないから兵隊さんを出征させるとき何日分の食料を持っていくと思います？

絵をみると兵隊さんは背囊を背負い、飯盒をくくりつけてますよね。あの背囊の中にめしをいれていくわけです。日本人は困ったことにごはんを食わないと力が出ないんですよ。ごはんは一日六合なんです。それを三分、一升八合を入れていくわけです。三日で戦争が終わるわけではない。

ということとはあとは現地調達なんです。

そこで日本がいたるところで現地の人に嫌われたのは、現地調達をする。というのは終局のところ一種の略奪行為になりますよね。泥棒みたいなもんです

よ。それが事実なんですよ。どこの作戦でも陸軍は三日分なんです。三日分持つていくわけですから、兵隊さんは一週間かればあと四日分はしようがないから現地で民衆のところへは行って、西部劇のインディアンみたいに調達する。はじめはカネを払ったでしょうが、そういつまでもつづかない・

藤井 あんまり人間のことはいいたくないけれど、インパールの総司令官はこれもまた牟田口廉也なんだよ。

半藤 そう、また牟田口なんですね。

藤井 つまり異常な男なんだよ。日中戦争をはじめたのも牟田口だとさっきお話がありました。が、こっちへ行って「インパール作戦」をやったのも牟田口廉也なんだよ。師団長たちは「やめなさい」といつているんだよ。

半藤 さすがに時間がかかるだろうというので、三日間ではむりだと思っただ、牟田口が考えたのは何かというと、「ジングスカン作戦」と称して、西部劇ではないですけど、牛を何百頭となく現地調達して連れていったんですよ。

ビルマの牛をあつめて、もちろんいくらかカネは払ったんでしょうけれど、集めてそれを連れていったんですね。伊藤さんはインパールへいかれたんだからわかると思いますが、ビルマの道はそんな広い道じゃなくて細い道ですよ。

伊藤 はい。

半藤 それで山岳地帯にかかると崖があるんですよ。いったことないけれど。

伊藤 もうすこし中まではいるとコメがとれるんですよ。

半藤 牛が次から次に崖から落っこちちゃう。

藤井 そういう行動の裏には人間的な関係がある。司令官が牟田口という異常な野郎なんですから。

半藤 野郎といわれるくらいに牟田口は悪いやつですが、こういう無謀な例が多いですからね。

藤井 こんどもし憲法を直すとしたら、そういう牟田口のような人間がかならず出てくるんだよ。だから嫌なんだよ。牟田口のような人間がかならず一割かなんかいるんだから。そういうのをえばらしてはいけない。軍人にだって立派な人がいるんだから。わたしはそう思う。

半藤 あまり悪口いうと兵卒として懸命に戦って死んだ人に申しわけないけれど、補給がなくて餓死で死んだ人たちはほんとうにお気の毒としかなんともいえないですよ。

伊藤 そうですよ。

藤井 「白骨街道」というんですよ。牟田口廉也が白骨にしたんですよ。ぼくはなんでもいえるけれど、そういう人の遺族にすれば、人間のかすみたいなやつが軍人の偉いやつになるといいうしくみ。それが憲法改正なんですよ。

伊藤 そういうことですね。

軍隊という組織的なものもそうなんですけれど、まともな人間が戦場にいくと人間が変わってしまうということも含めて、軍事活動というものは、そういう特性というか癖というかを本来持っているんだということは軍事問題を論じるときにまず頭に入れておかなければならない。

半藤 そうですね。これはなにも日本人だけではございませんで、ドイツ人もロシア人もヨーロッパ戦線ではすごいですよ、ロシア人の強姦とかは。

藤井 そのとおりだと思います。

半藤 ものすごいですからね、ドイツ人が金輪際許さないというくらいに。

藤井 そのとおりだ。

脇山 かならず戦争に負けた方がレイプされるという。兵隊さんが狂っちゃっているんですよ。

藤井 戦争ではそれがあたりまえなんだよ。言いたくないけれど、戦争のときに真上で飛行機がぶつかってアメリカ兵が落ちてきた。そのときにかれらは死んでほらわたがちぎれていたんです。そのときに思ったのは、戦争はアメリカ人も日本人もみんな犠牲者なんだということ。戦争をやったやつは違う人間とまではいわないけれど、やっぱり国家なんだよ。国家と国民とは違うなということをも本能的に感じた。

尾崎 日本人のやり方で人を殺さないですむやり方があればそれでいいのです

が。

藤井 人を殺さないですむ日本社会は一〇〇年は持ちますね。

半藤 いまの憲法ですか。

藤井 いまの憲法を含めてですが、人が人を殺し合うことはやめようということ。一〇〇年のちには殺し合いがあったことを知らないから、また戦争しますよ。殺し合う。歴史は繰り返しているじゃないですか。だからぼくは生きている間は絶対にそれを許しません。

尾崎 日本人として、人を殺してはいけないということ。

藤井 そう。おれは生きている間は絶対やるよ。だけど歴史的にみると一〇〇年がひとつの区切りかなと思っている。

伊藤 ひとめぐり。

藤井 角さんは「戦争を知っている奴がいるかぎりはずっとたいに大丈夫だ。戦争を知らないやつが出てきたらこわい。で、藤井おまえな、勉強をよく教えてやれ」といった。

やっていますよ、しかし限界があるな。つまり戦争を観念論としてしまう。

ぼくがいちばんこわいのは、戦争というものを動画で考えている人が多くいることです。動画では人を殺すんですよ。ところがまた生き返るんですよ。つまりそういう世界になっちゃうってことは現実なんだよね。

戦争へむかう小さな芽を摘みつづける

半藤 わたしはいまの「日本国憲法」ができたときまだ中学の四年生でした。あ
あすばらしい憲法になるんだとよろこんで、うちのオヤジに「日本は戦争に負け
たけど、これからすばらしい国がってくれるんだね。すばらしい国がくれるのは
よかったね」といったら、オヤジが、「馬鹿もん、お前は空襲で水の中に落ちて
水をがぶがぶ飲んだから、頭に水がたまってるのとちがうか」。 (笑い)

オヤジは「人類はじまっていろいろ戦争がなくなったことはいっぺんでもある
か」。それから「この国が近代日本になってから戦争戦争戦争でずつときてるじ
やねえか」といった。一〇年置きぐらいだという。

たしかに西南戦争があつて、日清戦争があつて、日露戦争があつて、あとに
第一次世界大戦があつて、そのあとに満州事変があつて・・・。

藤井 まあ一〇〇年はもつほうの話にしましょう。

半藤 「戦争がなくなるはずがねえんだよバカ」といわれましたよ。そのときわ
たしは、「このオヤジは戦争中も日本は敗けるといつづけてバカだと思っただ
れど、戦争に負けてからもっとバカになってしまった」。 (爆笑)

そう思いましたけれども、そのオヤジはあっさり死んじまいましたけれど、
いってやりたいんですよ。「日本は七〇年間、平和できましたよ」って。

藤井 そうだよ、それぞれ。

半藤 これは自衛隊のお蔭じゃないですよ。日本人が選んできたんですよ。

藤井 それぞれ。自衛隊だけではないですよ。もちろん「日米安保」でもないですよ。ぜんぜん違う。

半藤 これはうちのオヤジにね、「見ろ」っていつてやりたいんですよ。明治の人でしたから戦争に負けたのがよほどがつくりしたんですね。あんなに戦争に反対した人がつくりして、毎日のような大酒を飲んで、当時のエチールですか。

伊藤 メチールは飲んだら死んでしまいます。

半藤 わたしにメチールを飲ませてみせて。「だいじょうぶだな、これ」。

脇山 あぶない。親とは思えない。

藤井 ほんとうによくわかる。

半藤 ほんとうにひどいオヤジでしたね。でもあつさりと死んじまいましたね。でもオヤジのいつているのもわかんないでもないんです。戦争は天から降ってくるわけではないんですから、わたしたちがじぶんたちの生活の中で戦争の芽がでたらプチンプチンつぶしていくことが大事なんであって、芽をつぶせば戦争まではいかないですよ。これまでそうやってきた。

藤井 ほんとうです。なんとかやりましょう。

半藤 自民党がいまのような集団的自衛権とか緊急事態法とかのシステムをつく

って戦争をできる国にしようとしているわけでしょ。これは藤井先生に文句をいえることではないですけど、自民党がやるうとしている。

藤井 わたしは大蔵省の公務員のときから二一年間、役人をやったんです。そのうち五年は官邸にいたんですが、その間に「日米安保」をやった岸信介のときにもいたんです。

岸信介はなんていったかというのと、繰り返しになるかもしれないけれど、「おれのやっている『日米安保』ということは片務的だといわれるならそれでいい」。つまりアメリカは日本を守るけれど、日本はアメリカを守らないでいい。「これが日本の憲法だ」といいました。

これは理屈は正しいんです。これをどうするかですね。国民のあらゆる層での検証がなされなければなりません。孫にいたっては勝手に勝ちちゃっているんですよ。酔っぱらうと繰り返しが多くなりますけど。

「国家の品格」(国益)は平和を守ること

半藤 わたしはわかりやすくいうのはむずかしいんですけど、日本の国益国益といいますよね。

日本の国益という現実的なおかねもうけの貿易上の国益とかありますけれど、日本はどういう国であるかという意味の国益は何かといったら、「七〇年間戦

争をしなかったんだ」ということ。現実にはわたしたちは戦争をしない国をつくってきたんだというのが国益だとわたしは思うんですよ。

これは東南アジアの国々ばかりでなくほうぼうの世界の国々がある程度わかっていると思うんです。それで信頼を受けている。

日本がそういう国でありつづけること。これは最大の国益だと思いますよ。この国益をすててアメリカ軍の助太刀に行くことはまったくくないですよ。

藤井 うれしいな。やっぱり大先輩だ。

半藤 そういうふうにはあくはあつさりと考えてるんですよ。

アメリカ軍の助太刀に行くために集団的自衛権などというものをつくって、なぜ大切な日本の国益を捨てるのかと。七〇年間ずっと保ってきた国益を捨てちゃうことになるんですよ。

伊藤 そうですね。七〇年間、中ではごたごたしていますけど。それでも国益として持ってきた「国家の品格」ですね。

半藤 そう「国家の品格」(国益)です。

中でお互いやり合っているのはいいんですよ。それはかまわないですよ。だけど「国家の品格」として外に対しては守ってきたんです。この最大の国益をすててですよ、アメリカ軍のけんかの助太刀に行くことはいけませんよ。

伊藤 ないない、まったくおっしゃるとおりです。

半藤 単純な言い方ですけど、そう思っているんですよ。

藤井 昔からそう思ってくれている人かと思っていきましたが、ありがたいな。ほん
とにありがたい。同じ意見です。

脇山 そろそろサインタイムです。

半藤 サインをするような本じゃないんですが、幻冬舎のこの『歴史と戦争』は
最近、抜粋して人がつくってくれた本で。

脇山 わたしはこれがいいと思うのは抜粋だから短いでしょ。だから読むほうと
しては自分の思いや記憶とかで考える時間があるんですよ。ひとつ読むと思いが
広がるんです。それがこの本のつくりのいいところ。

半藤 きょうも来る車のなかで話したんですが、人がつくってくれた本でおかね
儲けしているんですよ。(笑い)

この『歴史と戦争』は楽ですよ。楽といっちゃおかしいけれど。わたしが苦
労してこしらえたものでないから。でも人間はこういうもので稼いではいけませ
んね。やっぱり奮闘努力しないと。自分で努力しないとけない。

堀内 わたしはサインをいただくのに『B面の昭和史』を選びました。

半藤 そうですか、ありがとうございます。

脇山 『歴史と戦争』はすぐ売れてるんですけどね。

半藤 みなさんに買っていただいで。一〇万に達したんです。悪いから印税は半

半分分なんですけれどね。まとめた方のほうが偉いですよね。

脇山 八〇冊もの本のなかからこれだけ抜粋するのはたいへん。

半藤 先生の本棚にも保阪正康さんの本はいろいろありますが。保阪さんは今なんでも後藤田さんなんですよ。後藤田正晴先生に私淑しているんです。

藤井 後藤田さんはわたしも好きです。この人は「政治はプロでなければいけない」と常々いつていた。

半藤 先生は保阪さんとお会いになったことはありません？

藤井 会っています。

半藤 わたしよりは政治のことにくわしい。

伊藤 半藤先生の本を読ましていただくと、日ごろ疑問を持っているいろんな要素があるもんですから、たとえば教科書だとこれは政治、これは経済、これは文化とかに分かれていたり、時代で区分されたりしている。それが人間として自分がそこにいるがごとく、総合して出しているから、こちらも生きた人間として音やにおいまでも入ってくる。

半藤 そんな偉い人間じゃありませんから。

ところで藤井先生は大学で野球ですけれど、わたしはボート部で、そちらのほうでは少し知られていますけれど。

伊藤 戸田ですか。

半藤 いえ、わたしは隅田川です。いまはボートはみんな戸田橋へいっちゃいましたが、むかしは隅田川でやっていたんですよ。レースもなにもかも。どこの大学であろうが高校であろうが隅田川で練習をし、レースをしていたんです。夏目漱石なんかも隅田川でボートを漕いでいるんですよ。

ところが、それを記念するものが何もない。それで去年ですが、隅田川に記念碑を建てた。

伊藤 そうなんですか。

半藤 近代日本のスポーツというのはボートからはじまったんです。野球よりはるかに早くはじまったんです。

その記念が何もないのは残念だということで、隅田川に記念碑を建てようと思いついたのは東京外語の人なんです。各大学のボート部のOBに声をかけまして、賛同してくれないかといったら全部が賛同してくれまして、ついでに寄付をしてくれということで計画が進みまして、わたしのところに電話がかかってまいりまして、「全国の大学で隅田川に縁がある連中はみんな賛同している。ついでに建設委員長になってくれ」というんです。なんでおれがと聞いたたら、「長生きしていて全日本選手権で優勝したことがあるのもおまえさんで」という。「もうひとついえばおまえは少し有名である」。(笑い)

わたしの時代のボートは藤井先生の野球よりは強かったです。野球は残念な

がら二位がいいところですが、ボートの全日本選手権でわたしは優勝しているんです。それで建設委員長になった。そしたら先生おもしろいですね。隅田川という川の管理は、国土交通省、東京都、墨田区の三つの官庁が管理している。碑を建てるだけなのにそれぞれうるさくいうんですよ。

なにもしないでいいという約束だったのに、出てきてくれといわれて、出て行っていろいろ説明をしましたよ。

で、はじめに国土交通省の河川局なんかについて。それから東京都へ行ってOKしてもらって。問題は最後の墨田区で、おかねを出させようといわれると区は思ったらしいですよ。「全国のOBが全部出すといっているから墨田区へは一銭も負担をかけない。ただ碑をたてる場所だけを墨田区が承認していただきたい。建ったあとのそうじとかの管理は区がやっていたきたい。それだけです」といったら、「あ、それだけのことですか」ということになって。

山田 ずいぶん現金な話ですね。

半藤 去年の九月に堂々たる碑が建ちました。

そこに文句を書きまして、最後に「建設委員長 半藤一利」という名前を彫るから名前を書けといわれて書いたのですが、それが彫られて。墨田公園の桜並木の入口のところに建てられたのです。みなさんは隅田川へはあまりいくこともないでしょうが、お花見のときにでもぜひご覧いただきたい。

ところで東大野球部の記念碑はどこにあるんですか。

堀内 碑はともかくたいへん立派な本が出ていますよ。

半藤 本があるのは知ってますよ。わたしたちボート部だってありますからね。

脇山 ボートははじめそんなに好きじゃなかったと書いてますけれど。

半藤 はじめはそうじゃなかったけれど、やっていたらおもしろくなりましたね。

堀内 半藤さん、これです。立派な本でしょ。藤井さんと山田さんたちの労作で。

山田 藤井さんはわれわれの野球部の監督でした。

半藤 編者のその桐蔭会というのは？

山田 高等師範です。

半藤 あ、高等師範ですか。そうですか、高師付属ですか。隅田川で高師付属と開成は定期戦をやっていましたですね。

藤井 開成は殴る学校だから早く逃げて帰ってこい。(笑い)

山田 ぼくも隅田川で漕いだこともあります。「開成健児ここにあり、ふれふれふれ！」なんて相手方を応援したりして。

藤井 開成はいまや紳士のあつまりになっている。

半藤 隅田川はまっすぐでない。そこでカーブのところにフラッグを立てるので

すが、高師付属と開成の試合のとき、そのフラッグ入れを手伝いをしましたよ。
脇山 ではここで写真タイムに。

藤井 みんな半藤さんのまわりに集まって。

山田 一升瓶もいっしょに。

藤井 いやあこういう会があることは記念になるんだよ。

半藤 藤井先生は大事にしていただかないとね。きょうはみなさんとお目にかかっておもしろかった。

堀内 きょうは遠路きていただき、長時間のお話ありがとうございました。

藤井 先輩ありがとうございます。光栄です。ほんとうに。

半藤 みなさんに本をたくさん買っていただいて。またお目にかかります。お元気で。

止

文責・堀内正範